毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢

明治二十九年一月廿五日發兌



第七拾號

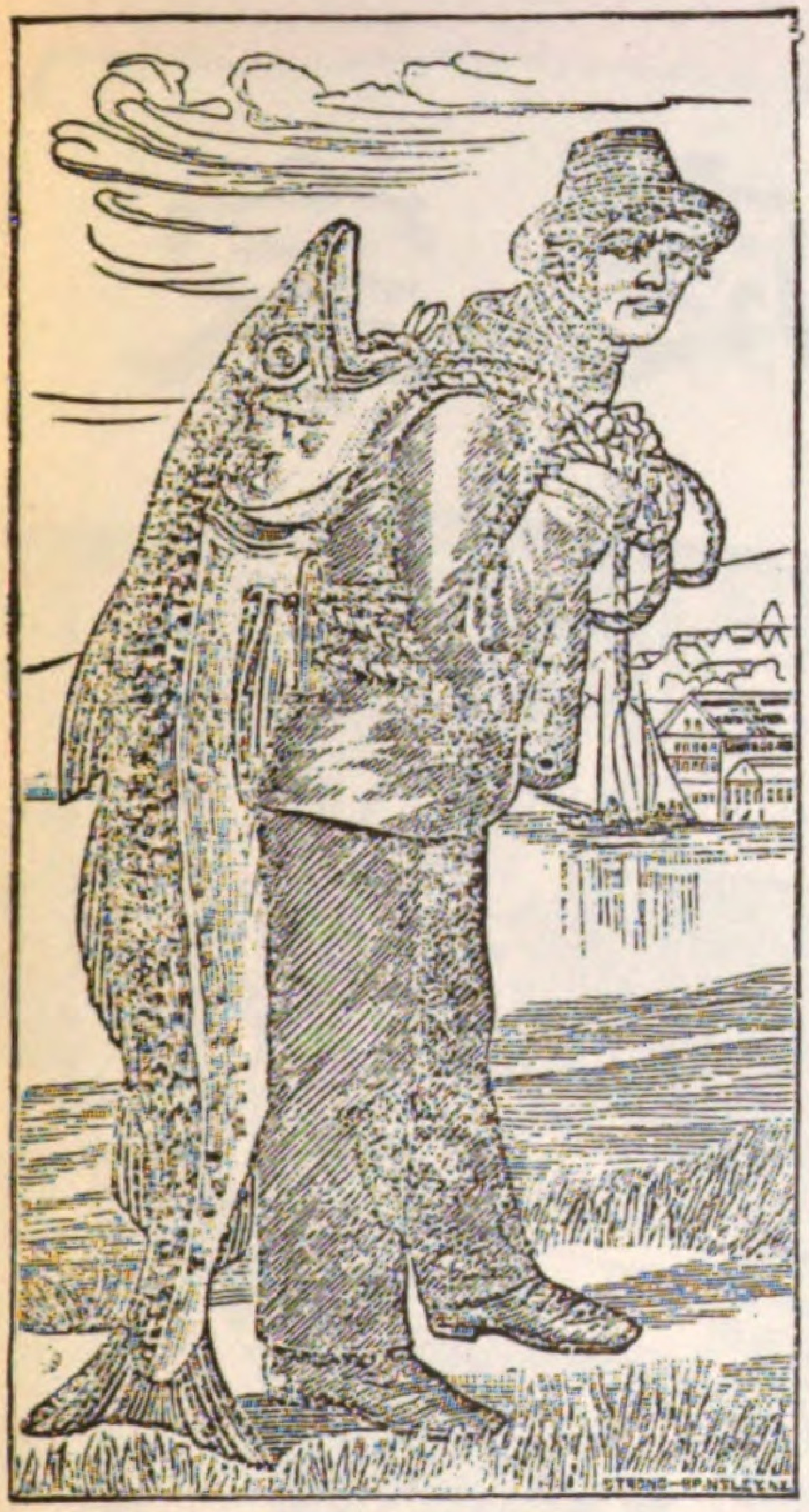
○血液○は常に充分ありて病毒なきを本性とす、貧血症は滋養分なき血液より起るものにして瘰癧は病毒の萠芽を顯すものなり、○○○○○彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く血液を富まし之れを清淨にし凡て血液より起る瘰癧貧血等を豫防し身躰を養ふに必要なる血液を造るなり◎◎筋肉の減少するは滋養分の缺乏を示すものなり此の場合にはスコット乳菓に多く含み居る處の精力を恢復し疾病を防ぐに必要なる成分を要するなり

○健全なる筋肉○は活力を貯へ居りて必要ある時は出で來て、補ひをなすものなり肉の落て痩せ行くは活力を求めつゝあるを示すなり、此時何か申分あるなり

スコット乳菓は必要缺くべからざる滋養分を與へて筋力の衰へたるを速に恢復するの効最も著しきものなり、殊に痩せたる婦人には最奇効あるなり咳嗽、風邪、咽喉病、肺病、血液病及び虛弱等に、此乳菓の効驗實に驚くべし◎世界の大醫は此の乳菓を最も効能ありて精氣を增し滋養分ある食料と證明し居れり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價進呈す

左の大取次所の外各藥舖に賣捌居れば御求あれ



横濱境町	友田嘉兵衛
同　境町	鳥居德兵衛
同　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
同　室町	資生堂
同　本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
同　道修町二丁目	武田長兵衛
同　道修町三丁目	田邊五兵衛
同　道修町二丁目	田畑利兵衛
同　道修町二丁目	福田清右衛門
同　道修町二丁目	鹽野儀三郎

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

○定價

一冊	金五錢	地方郵税共 金五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰）一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平

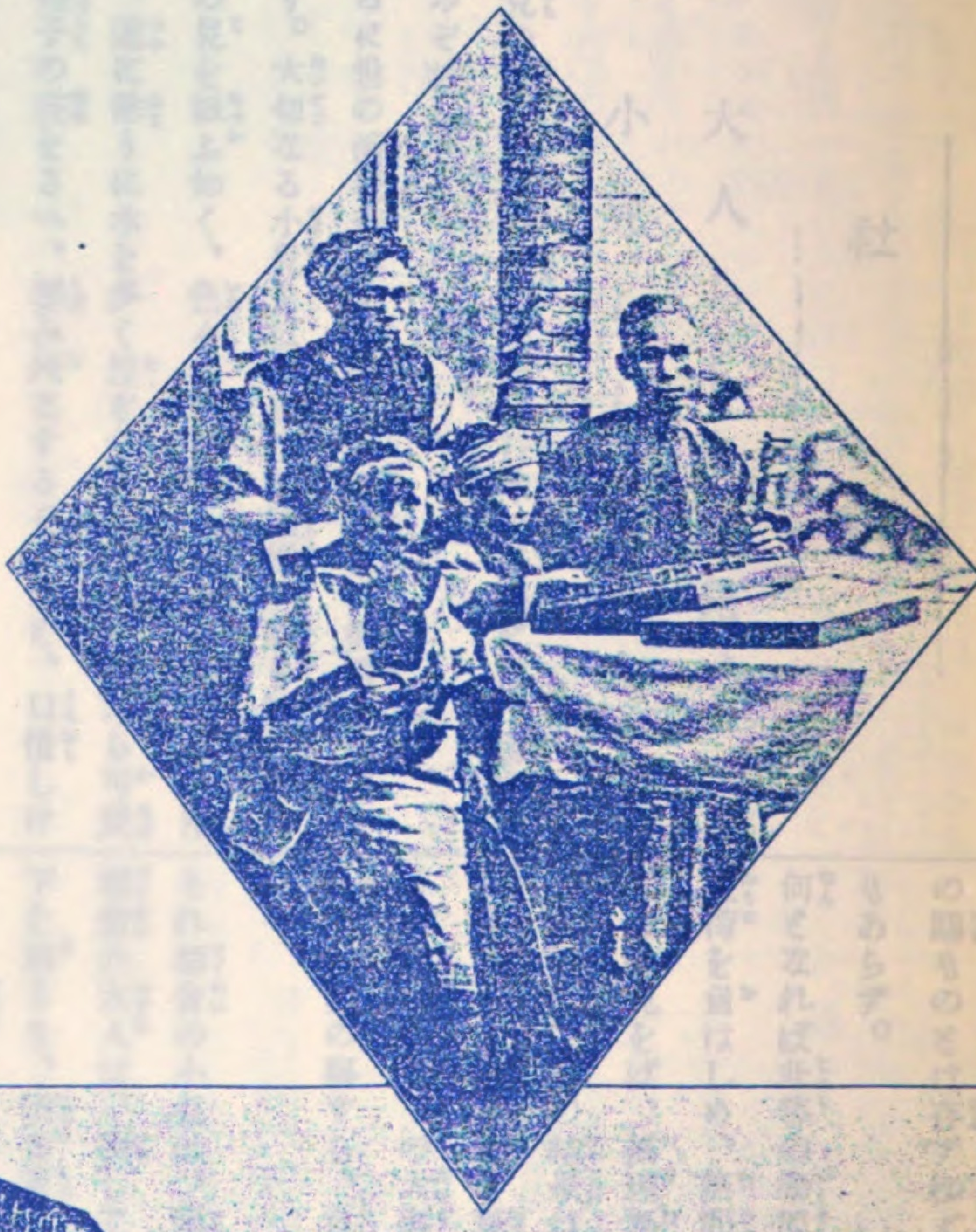
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

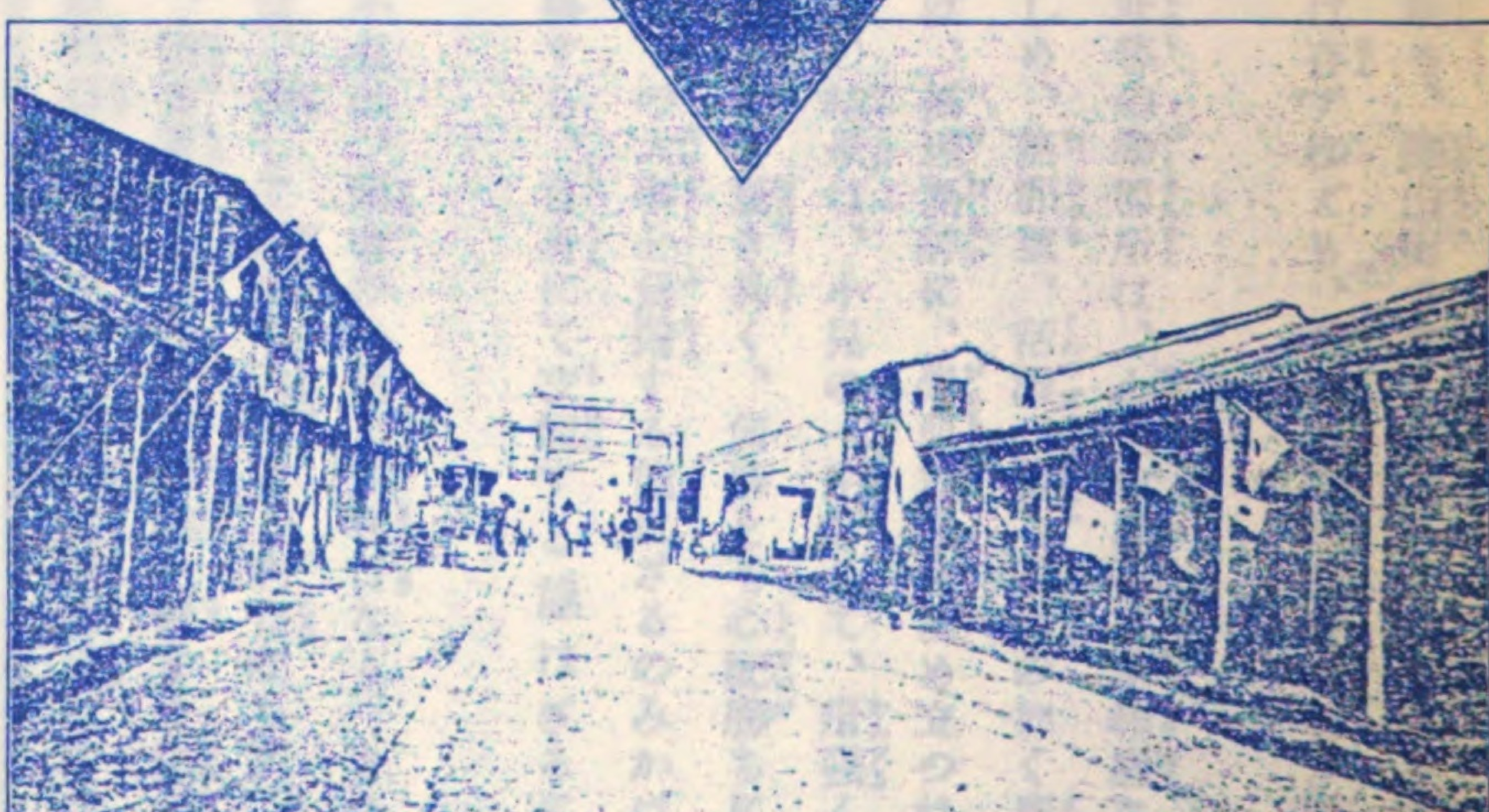
明治廿九年一月廿五日發行

家庭雜誌第七拾號

目錄

臺灣土民家庭の樂





臺灣臺北々門街

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

家庭雜誌第七拾號
（明治卅九年一月廿五日發兌）

社説

大人らしき小兒と小兒らしき大人

小兒の餘りに小利口なるは、行末の發達には、害多きものぞかし。

然るに世の兩親若しくは祖父祖母達は、無暗みに之を誇り。大切なる小兒をば、慰み物同樣、恰も狆の兒、猫の兒を扱ふ如く、色々の藝を敎へ、様々の智慧を附け。遂に餘りに水を多く注ぎたるが爲め、あたら可愛き撫子の花をさへ、萎み死なするぞ、いと、口惜しけれ。

世には幼稚園とか、小學校とか、或は安息日學校とか、小兒の學問所も、澤山出で來りぬ。吾人は難有き文明の賜ものとは存ずれども、却て難有迷惑の筋なきにしもあらず。

何となれば此等の學問所は、小兒の身躰に不相應なる重荷を負はしめ、無邪氣、活潑、恰も若竹の如く素直なる小兒をば、無理無躰に、學問攻めに攻め立つれば也。而して其の結果は、小兒の一生をして、疳強く、神經鋭く、何事にも驚き易く、何事をも心配勝ちになり。遂ひに天下の大事を負擔する能はざるのみかは、一家一身の事すら、自身にて支配する能はざるに到る。

それ都會の小兒は、田舍の小兒より利口なり。されど都會の大人は、決して田舍の大人より利口ならず。天下を取るも、田舍者なり。大なる事業を做すも田舍者なり。小兒の利口なるは、決して一生涯利口なるの證

據にはあらじ。

小兒は小兒らしきこそ善けれ。小兒らしきとは、小利口ならず、こせ／＼せず、小さき老翁の如くならず、何事も活き／＼として、世俗に所謂風の子と申すほどこそ善けれ。



紙鳶も颺ぐ可し、獨樂も廻す可く、竹馬に乘る可く、兵隊の眞似、土合戰、活潑なる軍歌、何にてもあれ、將來心身の健全を來たす要素となる可きとは、成る可く奬勵することこそ妙ならめ。

世には無用の用と申すとあり。遊戯の如きは、その尤もなるものぞかし。世には有用の無用と申すとあり。學問攻の如きは、乃ち此の一例ぞかし。吾人は文明の風潮か、餘りに小兒の領内を侵すの恐れあるを以て、斯く一言す。成る可くんば、小兒の大人らしきよりも大人の小兒らしきこそ面白けれ。

蜀山人の名刺

年始。上巳。端午。七夕。八朔。重陽。
〆六ツ御祝儀申上候
暑中　寒中
〆二ツ御見舞申上候
但し氣に向き候へば不時に參上仕候
四方赤良

科學

花咲き匂ふ春の野邊鳥鳴き笑ふ夏の山或は花にあくがれつ或は鳥に誘はれつ「自然」の廣き庭の面をわがもの顔にかけめぐり谷間を飾る白百合花や岩間がくれのすみれ草あるは氣高き松杉の見上ぐる如き大木に人なき路の芝苔や小指ほどなき草の葉とその下かげに宿かるゝ姿小さき虫けらと大ぞら高くかける鳥あるとあらゆる草と木と虫、鳥、獸すべてこの廣き宇宙にあらはれて日毎々々に眼に映つる造化のみわざ志らべ得る學の道こそたのしけれ

いでやいとしき友どちよ汝れがまわりに目をはなちたのしき道に進めかし四季をり〳〵に從ひて汝れが智識を增さしめよ　松ヶ枝女

植物

蒲公英

物凄き深山淋しき野原に住むを厭ふて常に人跡近き處を追求する獸類ある如くたんぽゝ車前の如き美はしき花愛らしき草にも亦只だ或は主として人家の近くに生じるものあり

春夏秋の三季に當り蒲公英の黄金の花は園、野、垣根のほとりなど「造化」の巧みなる手にて鋤かれたる土地より自づから發生するなり

幾多の花はその珍らしさもて吾人に貴ばるれど此の花や實によの最も普通なるの故をもて吾人を樂ましむるなり想ひ見よ吾人の幼けなかりし時屋後の田圃に走り出で溫かなる春の日草の褥に横になり涼しき夏の夕木影に坐わりてたんぽゝの黄金の花を摘み取りむしり去り散らしては又新たに摘み採りなどせしを、げに此の

花や罪なき遊興に日を暮らせし吾人の幼時を追想せしむるものなり

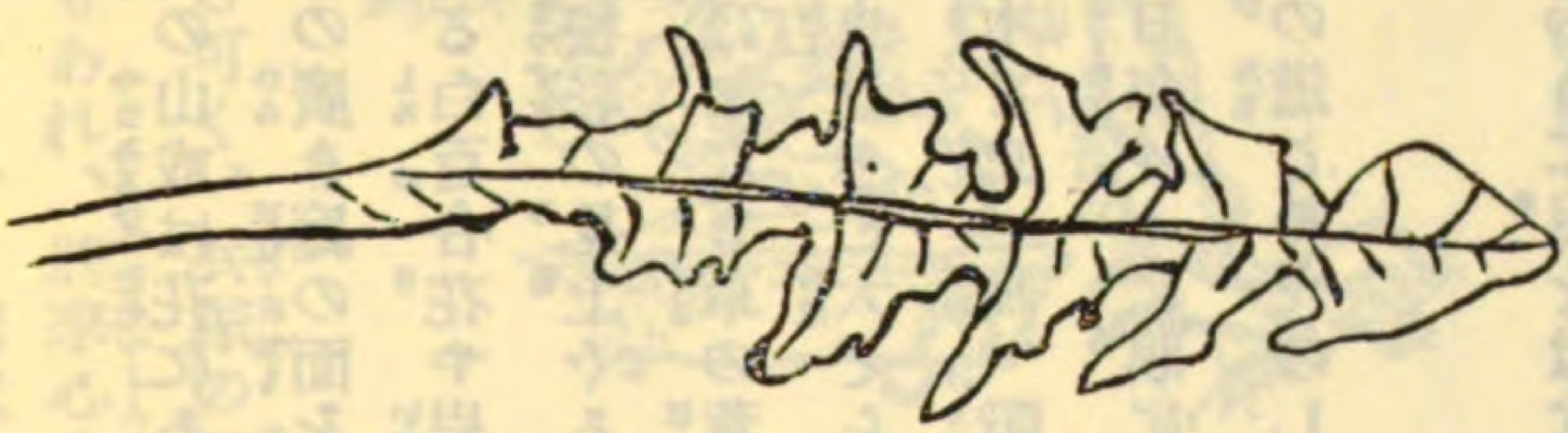
我が國に多き如く歐洲全土及び北亞米利加の諸州にても路傍常に此の花を見得るなり

解剖

葉

たんぽゝは無莖の植物なり即ち見られ得べき正當の莖を有せじ葉と花梗とは直ちに強き、液汁多き多年生なる根の頂きより生ずるなり

乳の如く白き品質の味苦き液汁は全躰に充ち渡り根、葉、花、何れの部にても傷け或は破る時忽ち流れ出るなり此の液汁は彈力脂を含めども阿片は含まじ



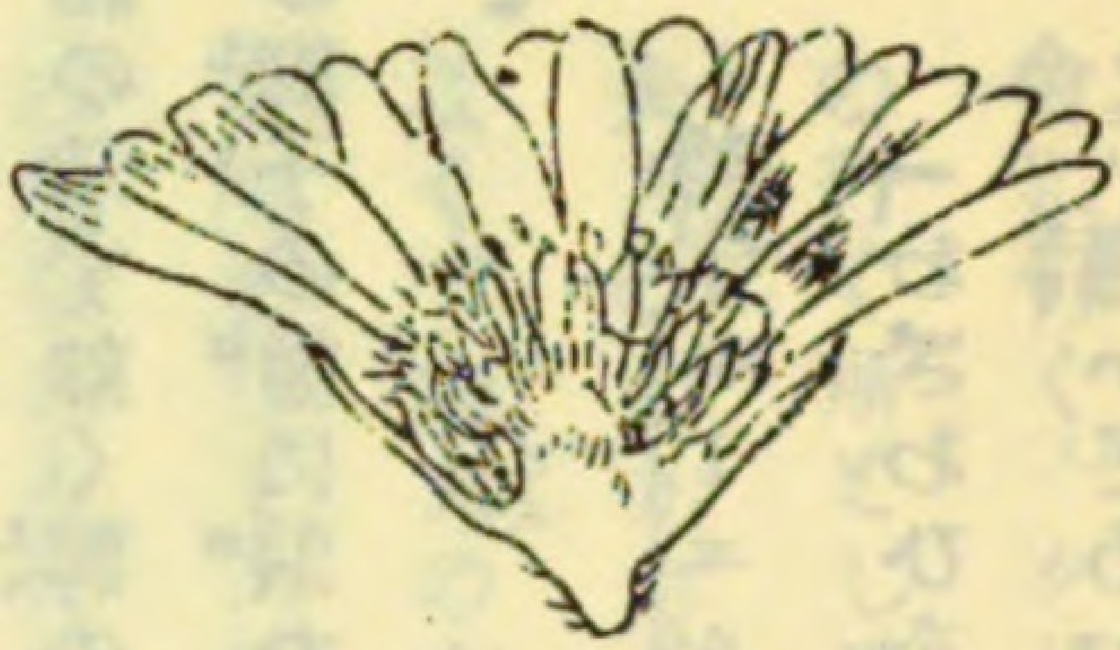


葉は凡て根元より生じ外形線は稍圓なれど縁邊は後方に傾きたる著るしき耳たぶの如く削らる即ち後方に鉤

形を成すものなり

花

花の開法も亦根元より數本の中空なる花莖各々相似たる花苞を頂きて根元より發生するなり總苞は二重なり外なるは短くして反曲し内なるは一直線に直立す花托は小苞を有せじ毬花中の小花即ち内部の花は凡て完全にして黄色の花冠と柔らかき白き刺毛の花蕚とを戴ける子房（形ち楕圓にして種子となるべきもの即ち胚珠をその内に含有する下部の嚢狀なる部分）とより成り立つなり



晴れ渡る日にはこの小花明らかにあらわれて能く昆虫を誘へど雨天や夜間には閉ぢて花密の浪費を防ぐなり

花　實

花咲き畢りて後花實の成熟する間蕚を凋める花冠を覆ひ遂に充分實のるを俟ちて蕚再び開くなり此の時に當り各小花の毛の如き花蕚を輕氣毬の如く膨脹して直ちに種子は翼を具ひ風のまに〳〵遠近に飛び行くなりされど此れ造化の巧妙なるみわざの最後にあらず種子は尖りて刺毛を有するが故飛び下る時猶左右に動きて地中に入り自ら植え付くものなり

用

此の花の若き葉を晒らしたるものは佛國にて美味なるサラド（菜に酸、鹽、油及び香料を和したる食物）として用ひ又青き長じたる葉を煮て用ふるなり

根は或は水に浸し或は煎じて藥品に用ひらる主として肝臟或は消化機關の慢性病に用ひらるゝなり

又炊ぶりて磨り碎かれしものは「コフヒー」及び「チヨコレート」の材料として用ひらるゝともあり

名

蒲公英は英語にて「ダンドリアン」と云ふ之れを佛語の

「ダン、ド、ラ」のなまりたるものにて「ダン、ド、ラ」とは語の示す如く獅の歯といふとなり之れこの鋸の如き葉の獅子の歯に似たりと云ふ考より起りたるものなりとぞ

詩宗ローエル曾て此の花を歌ふて曰く

「わざわひあらぬ黄金もて
塵いとあかき路のべを
優しくかざり路のべに
見慣れし姿うち据ゆるいとしき花よ
汝れはそも春の女神のまき散らす
賜ものなりと知らるなり」と

◎牛疫流行　牛疫流行し始りたり牛乳飲用に注意し玉へ

実談

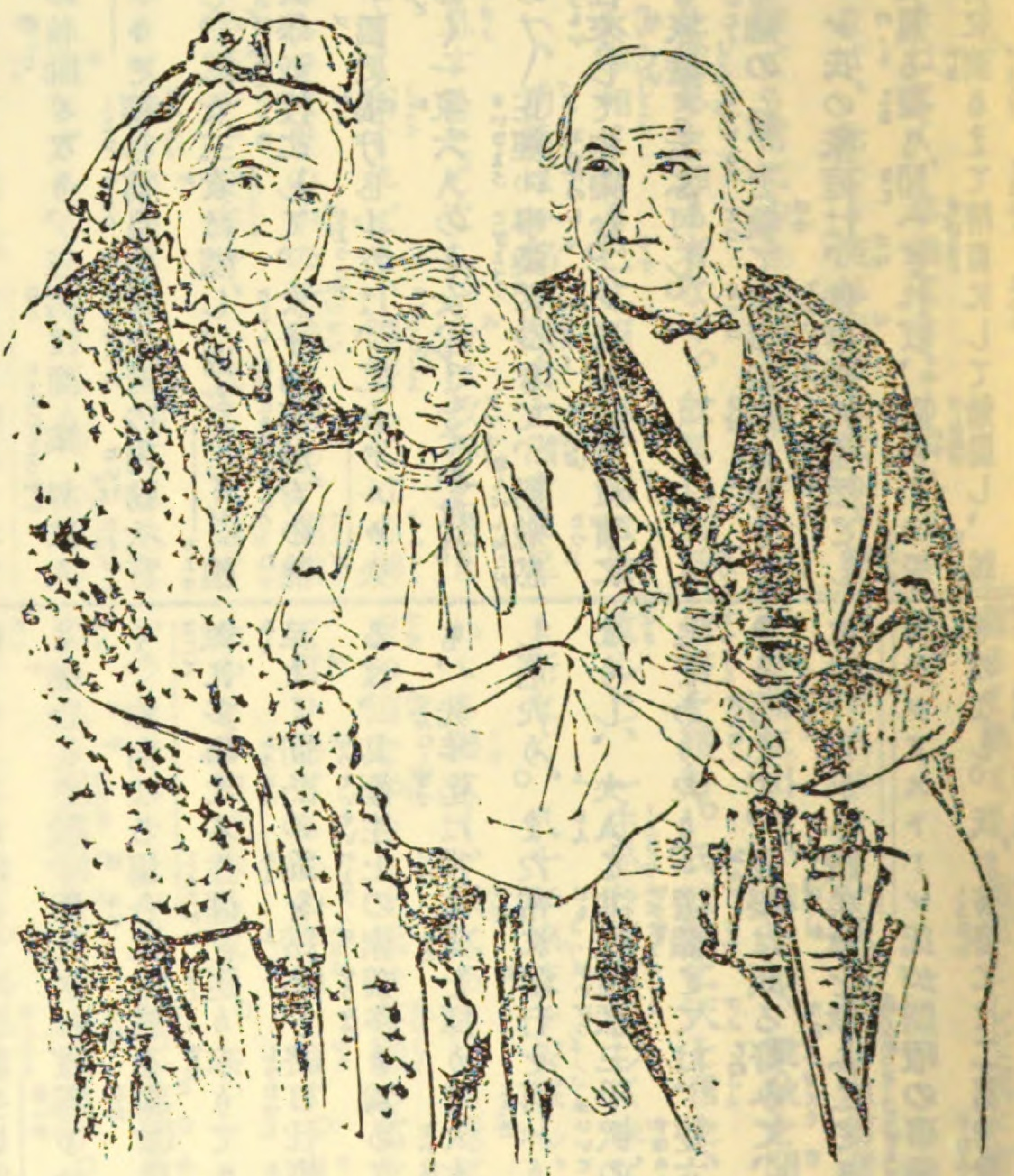
家庭のグラッドストーン氏

楓葉

グラッドストーン氏四度目の總理大臣を罷めてハワァデンの閑居に退隱の身となりしより二年疾く立ちて、今は八十七歳の高齢となりぬ。圖に掲ぐるは、昨年の十一月グ氏夫妻其愛孫ドロセー孃と共にとりし寫眞を摸寫したるものにて、八十七歳のグ氏如何に壮健なるか、八十五歳の夫人如何に其昔グリンス家兩美人の其一人と云はれし面影を今に留めたるかを見る可く、また其幸福なる家庭の片影を覗ふに足る可し。

古來大人豪傑の事業をなす、多くは家庭の幸福是が助けをなすこと今更論ずる迄もなき事にて、グラッドストーン氏の如きも實に此助を得たるものなり。老夫人

カヂリンは極めて温順淑良の婦人にて、五十七年前グ氏に嫁ぎ來りてより、一日の如とく良人に事へ、美しく其家庭を築けり。或は打連れて撰擧爭に出かけ、或は伴ふて博覽會に行く。グ氏の行く所として夫人の行かざるなく、夫人の在る所としてグ氏の居らざるはなし。夫人また慈善の事業を勵み、おりおり米國家庭雜誌にも寄書す。七年前目出度グ氏と金婚の式を擧げりるが、其頃波斯の王英國に來遊中にて、其事を見聞し、歎息して云はれけるは、げにも珍らしき事かな、グラッドストーン氏は五十年の生涯に唯一人の夫人と共に棲まれ、余は一生に五十人の妻を有す、然れど幸福の多少を云へば、グ氏は余に優る萬々なりと。グ氏夫妻は實に多くあるまじき目出度老夫婦



と云ふ可し。

此目出度夫妻の間に子女八人あり。長男は逝き、次男はハワアデン教會の牧師となり、三男は商業界に入り、四男はハアパアトと稱し前自由黨政府の內務次官たりき、長女は夭し、二女三女は嫁し、四女ヘレン孃はニウハンム女子大學教授にして、女子高等教育の熱心なる奬勵者なり。圖に揭げし少女は、二女ドルウ夫人の女なり。右の如く一家六人の子女、才こそかはれ、境遇こそ違へ、おの／＼正經の事業につきて、勤勉怠らず。しば／＼相往來して相樂む。グ氏の家庭は實に多くあるまじきよき家庭と云ふ可し。

流石日輪入らぬ大帝國の政を執て立派に捌き行きし大人物の家庭とて、グ氏の家庭は、秩序誠に整然としてよく整ひ、聲高に罵る聲も聞へざれば、塵一とつ歪みしこともなく、僕婢に到るまで清肅にして勉勵し、誠に品格高き家風なり。健康は幸福の要素なるが、グ氏は實に健康なり。氏は昔より煙草を飲まず、多く酒を飲まず、早起家にして、衛生に注意し、肉を食するにも嚙むこと數十回せざれば嚥下せず、物事皆規則正しく、如何なる場合にも常を亂すことなし。八十七年の誠に多事なる生涯を送り來りても、眼よく細書を見、足よく凹凸の途を踏み、終日仕事をなすの氣根を有するは、其衛生上の素養多き爲めなり。今は已めたれども、先年迄は常に斧を揮りて大木を伐るを閑事業となし居たり。また常に步行を喜べり。八十を過ぎての事なりし、夫人と共に海拔三千呎の山に、平氣に上りしことありたり。遊戲とては、雙六位なれども、其もあまり嗜まず。音樂は頗る好みて、今も家內朝々の禮拜には、自から讃美歌を歌ふこともあり。然りながら、グラッドストーン氏が閑暇の事業は、讀書に過ぎたるものなし。氏が書齋には二萬卷餘の書あり。今日と雖も、常に讀書せざるはなし。二年前大宰相を辭して、

英國中號外の聲に驚く時、グ氏は其書齋にて靜かに古人の詩を翻譯し居たり。

人は望なきより悲しきはなく、事業なきより憐れなるはなし。萬づの惡しきは、此より流れ出づるなり。望ある者は、老ふると雖ども常に少きものなり。グラッドストーン氏は實に此消息を知る者なり。故に氏は政界にある六十何年、大宰相となる已に四たび、名は世界の端より端に聞こへ、功業は一部の歷史を滿すに足る程なるも、更に休息することなし。身は政界を退きてハワアデンに閑居すと稱すれども、讀書しては心神を練磨し、新聞を讀んでは世の中の形勢を察し、運動旅行して身を養ひ、手紙や、投書や、一刻も空に過す時刻なし。グ氏の如きは生命のある限り進步する人なり。其活潑にして長く老いざるも此爲めなり。大將の顏はよく三軍の氣を左右すと云ふ。グラッドストーン氏が活潑なる爲めに、家にあれば家振ひ興り、政黨にあれば黨勢振ひ、朝にあれば國勢振ふ。今や氏は野に隱ると雖ども、隱然として國に重味をつけ居ることなり。

グラッドストーン氏は基督敎信者にして、日曜には必ず會堂に出で、默思し、說敎を聞き、或は自から立て聖書を讀む。氏は實に天を信じ、正義を尊み、職分を重んじ、一生品行淸肅にして未だ曾て一點良心に疚しき所なく、八十年來夜々安眠し、半夜の寢ざめに心にかゝる隱なく、家にありても世にありても一文字に正直の道を步めり。氏は英國の富を以てするも往々にして買ひ得ざる心の平和を有す。自信勇氣なんどは、皆此中より出で來るなり。

グラッドストーン氏は實に眞面目なる人にて、時々は恐ろしき程眞面目なる人物なり。然れど小兒は猶氏を愛することを知る。其孫女ドロシーは氏の尤も愛する所なり。而して孫女もまた父よりも祖父を愛す。見よ、

彼女が祖母の膝に坐しつゝ、如何に左手をのべて其祖父を執へ居るかを。無邪の少女よ。去々年迄は、忙はしき世は卿が祖父の双手を就らへて片時も離さゞりき。今や卿が大なる老祖父は、卿が手中のものとなれり。幸福なる少女よ。幸福なる祖父よ。幸福なる家庭よ。

子守

二隅星庵

村里はづれ松かげに　むかしながらの野佛の
笑みを湛えしみ面や　懐かしむらむ垂髪子が
うち群れながら今日も亦　ままごとしては遊ぶなり
袂はらくらく夕さびし　野寺のかれにもよほされ
呼かわしつゝ打つれて　家路へかへる友のかげ
見送りながら只ひとり　のこるも子守の只一人
さすがに冴ゆる夕風に　肌をさむみ泣く乳子は
いや泣き出でゝ歩め共　揺れどもやめぬ悲さに
かてて加へて物すごき　暮れゆく野路のけしきかな
れん〳〵ころり寢よや子よ　れんれが母は去年の秋
れんれをうみて花籠や　笛や大鼓をかひにさて
れんれも姉も殘しおき　いまは都の空さかや
ひさりたのみし我父の　あはれ此春世を去りて
今ますえゝは繼母の　ひさ目忍べろ脊子ならむ
來つればいつも酒飲みて　料もなき子を飯つうちつ
れん〳〵ころり寢よや子よ　姉だにさむき夜嵐に
いさけなき身のいかならむ　手を打つ迄はいつ迄も
歸りな來そさけふ母の　言葉はあれど手は鳴らす
かゝる憂き世に長らへて　つらさ見むより淵川へ
身をは投けむとおもへども　うしや引かるゝ後髮
我亡きのちはそも汝を　誰かはぐゝみや守るらむ
れん〳〵ころり寢よや子よ　はや〳〵春草生ひたちて
やがて歩みて文かきて　都へますさ音にのみ
聞きにし母へ音づれて　斯くとは告げよ悲しさを
菅の小笠におひづるに　ひさの門には立つさても
われは服はゞ汝もまた　母をたづれてはる〳〵さ
ゆくにもしらぬ白雲に　かりれむすばむ草枕
山に飢ゑては實をひろひ　露にぬれては野邊に臥まさ
われや結ばむ疲れなば　汝もわが手を引けよかし
旅のつらさも憂きことも　二人し往かばいかばかり
たのしかるらむ幼子を　あはれみ玉へ野佛よ

道はより〳〵尋れつゝ　たどり〳〵て都まで
はゝに會ひなばもろ共に　袖にすがりて志み〳〵さ
おき捨てられし怨をば　言ひつくさなむよき衣も
人の形も花がこも　あまたもさめて貰はなむ
れん〳〵ころり寢よや子よ　唯それ迄はれんれして
見られぬ影を夢に見よ　この松陰はさむけれど
かへらば繼の母の前　またもうき瀬に沈むらむ
松の葉ごしの月寒く　夜風はさえに冴ゆれども
あはれ子守は猶去らず　乳子が叫べはおのもまた
なみだ聲してうたひつゝ　れん〳〵ころり寐よや子よ

文藝

島田愛子

佐々木信綱

夢か、夢にはあらず。現か、うつゝとはおぼえず。あはれ悲しきかな。あはれ痛ましきかな。吾をしへ子島田愛子は世をさりぬ。愛子よ、愛子よ。かくばかり歎き、かくばかり惜む心を知らば、いましの靈こゝに天がけり來て、吾悲しびの詞を聞け。

今の世の學校敎育の、師とよび弟とよぶは、多くは學校にある間のみ。我敎育ざまはさにはあらで、師弟の中らひ一の家族のやうなるをもて、父にあらず母にあらず、はたはらからにあらずして、其情まことの親子兄弟の如し。愛子が吾もとに來りしは、今より五年前なりき。子の如くはらからの如くをしへ導きて、すでに五年なりき。魚の子多かれど、まことの魚となるは少なく、あんらの木あまた花さけど、まことにみのるは少なしといひけんやうに、月に日に敎ふる人の數少なきにあらずといへど、あるは中途にてとだえ、あるはたゆみがちにして、まことの境にいたる人少なし。ことに歌の道は天才によるものにして、天才うとき人は、其奧がを極めん事かたかり。愛子はわが敎によりて、始めて歌の道に入たちしなれば、あだかも乳母が

吾乳もて育てし幼子の心地せられて、あるはさとしあるははげましゐつるに、あつく我を敬ひ信じ、ふかく我をしへを守りて、其性質歌の上にあらはれ、歌の姿なよびかに女しく、實情實景をいつはらず飾らずありのまゝにうたひ出たるに、いひしらぬあはれこもれり。
かつて古人の歌の中に、調めでたくたけ高き歌百數十首をぬきいでゝ示しつる事ありしに、そをすべてそらにうかべつるのみかは、我よみ出て折々ごとに、かゝる歌かゝる今樣をよみつとて示せるをも、すべておぼへゐて、我は忘れし時も愛子はすべて記臆しゐたりき。かくの如くにして、五年の間更にうみたゆむ事なく、殊に歌の才ありて、天性その骨を得たれば、年こそいまだ若けれ、をしへ子の中にても、三人四人のすぐれたる中に數まへつべく、いたく將來に望を屬して、わが竹柏園の那木の下風吹おこすべき人と、常に賴みゐしを、あはれかなしきかな、天此才女に年をかさず、玉は未だみがゝれずしてくだけにけり。もし歲月をつみて疵なき玉とみがき出なば、坂上の郞女の玉のひゞき、和泉のおもとの詞のにほひにも、おとらざらまじをとおもふも、あながちにあいなだのみにはあらざるべくや。
愛子東京に出て明治女學校にあり。今年の四月はゝや卒業の期なりき。いにし十二月廿六日のひるつ方、學校の休暇の間川崎に歸らんとて我もとを音づれ、昨夜のクリスマスのたのしかりし事、又女禮式の課業に、卒業式の日に證書をうくるさまを習ひたる事など語らひて歸りぬ。さるを一月九日、姉たか子のおこせし書に、愛子去年のくれより病みて、食物はか〴〵しからぬ由記しあり。されどさばかり重きにはあらじ、例の病に弱き性質なれば、腸胃などの痛みにもやあらんと思ひつゝ、十二日の朝、川崎町なる橘樹郡敎育會の講習に赴くとて、まづ島田氏をとひぬ。病室にいたりし

に、思ひきやたゞ十日ばかりの程に、おもはいたくやせ衰ろへて、目はくぼみぬ。病症は心臓病と脚氣のあはせ發せし上に、折々胃の痙攣さへ起りて、手も動かしがたく、足も自由になしがたしといふ。驚きぬるものから、心よはき事いひて病にさはらばと、つとめてはげますやうに、人の希望といふ事、病に打かつべき事など語らひたりき。愛子は泪こぼしつゝ我訪しを喜びて、姉君がよみてきかせし太陽の小說、また短歌の事など語り、我歌の姿を此比かへんとするをいたく心づかひし、かつて譯せし襯衣の歌の事などいひいで、おのが病の苦しびは忘れつゝ、わが道の進歩につきて、さま〴〵にいひくれたりき。又學校も今わつかなれば、とく怠りて、いかで此月の末にはゆかまほし。課業の書のチックンスハ、いかばかり進みつらむなど語りぬ。愛子が枕は、肩かけをもてまきてあり。そは愛子が常にまとひしものなりき。われはそをゆびざして、いつものやうにこを着て、我方に通ひくるやうにとくならではなど語り、又廿六日にこし時、學校の一月の文學會には、わが作りし太陽の歌を朗讀せんとおもふといひし事をかたりて、早くおこたりてよみてよといひ、又昨日の發會の歌をかたりきかせぬ。姉君かたへより、ソップをのむべき時來りぬ、のみてよといへど、愛子は、今はいや、後にとのみいふ。われ其いれ物を取て、わが茶碗に半をつぎ、われもたうべん、いましもといふに、さはとて快くのみたりき。十二時になりしかば、講習會にゆきぬ。會の事どもをへて歸途又立よりぬ。枕かみによりそひつゝ、心を靜に、はたつよく持つべき事ども語りゐし折しも、東京より佐々木博士來診せられぬ。診察をへて後、奥なる屋に行て病のさまをとひしに、心臓の呼吸かけるが如くなれば、身躰つかれはつべし、しかしてかの呼吸のよわらん時には、といひて詞をとゞめられぬ。いとほしや博士がしかいはる

ゝほどにては、愛子の病はいえがたき事か。いかで〳〵いま一たびもとに復してよと祈る願はかなはずやと、我は堪がたう成ぬ。猶しばし治療の上の物語をきくに、今夜より日に三回肝油の注射をなすべき事、又滋養物を少しも多くのますべしといはる。さるに愛子はかねてより牛乳を好まず。くすし父母の君姉君などのいくたびとなくすゝむれど、更に用ひずといふ。いとあやにくなり。又病室にいたりて、人は希望によりていくるものなれば、心をつよくせよ。とくおこたりて學の道をわけよかし。しかせんには、滋養物を用ひずては力つきがたし。牛乳はコーヒ紅茶などいれてのむ時は、のみやすきもの故、のみ試みてよと繰かへしいひつるに、さは明日よりのみ侍らむといひぬ。わが眞心の通ひて、のみにくきをものまんといひくれし事の嬉しく喜ばしく、猶ゐまほしけれど、東京へ歸らん時のあまりにおくれんもと、八時比の滊車にのりぬ。車中のともしびほのくらく、窓よりをちを見出せば、木葉皆ちりつくしたる林を吹しをる木枯の風あら〳〵しく、大空にきらめく星の光物すさまじき夜なり。道すがらいかならむ〳〵と思ひつゞけて家に歸りたりき。十三日の朝、牛乳にいれてのむべきコーヒと、林檎とを弟にもたせやりぬ。弟歸り來て、牛乳ものみつ、林檎も味よしといひつときゝて、いと喜ばしかりき。十四日にゆかんと思ひしかど、いさゝか風のけにおかされぬると、訪ひくる人絶間なきをもて、明日午後のにこそと思ひゐしを、思ひきや十四日の夜七時過る比、父君又姉君より、けさ六時五十分に遂にむなしくなりぬとのしらせの文來らむとは。あはれ十五日の午後に、愛子の病をとふにはあらで、愛子の葬儀をおくらむとは。

父君よりきくに、愛子身まからんとする三十分前、父母兄姉妹家人醫師等にむかひ、なき後の事をいひ、看

護の勞を謝したりときくも、泪のたねなりや。殊に今日葬送の道は、さいつ年の春、共に小向井の梅見にものせし時、過し道なりけり。靜に流れゆく玉川の水は、悲しびの歌をうたふがごとく、そよ〳〵と風にさやく堤の竹村は、わかれのふしをかなづる心地す。玉川の流は、とこしへによどみなく流れゆくらむ。さばれ雲雀うたふ春のあした、紅葉色こき秋のゆふべ、再、愛子のかげをうつす時あらじ。小向井の梅は、春ごとに咲匂ふらむ。さばれ今ははや愛子と共にみん春はあらず。今年ちりて又こん年にさくべき梅の花だに、猶ちりゆくは惜きものを、其蕾未だ世にあまねからでちりし花はや。身まがりし愛子はや。愛子年僅に十六才九ヶ月。性入にすぐれてさとく、心ばせなだらかに、親につかへて孝、友にまじはりてねもごろなり。かつて人と爭はず、かつて人を恨みず、かつて人をそしりし事なし。身富家に生れて、常に質素の服をまとひ、帶もかんざしも、あるがまゝに用ひて、未だ一たびも衣服の事につきて父母にこひし事あらず。常に衣食をつゝまやかにして、こふ所は唯教育の資と、書をもとむる値のみ。さりとてかの、殊更に女しからぬ風俗をよしとするたぐひ、才學をほこり高ぶるともがらにはあらず。其擧動の閑雅に女しきは、世の女子のかゞみともいひつべし。あはれ愛子を失へるは、われ一人の歎にはあらず。將來に望多き此淑女を失へるは、歌の道の爲に歎かはしき限になむ。かくわが歎き悲しむをもて思ふにも、父母はらから醫師佐藤の君家人たちの心も、又わが如くならむ。常に親しうせし學校の友どちの歎はたいかならむ。

昔は賀茂の翁、弓屋倭文子を失ひていたく歎き悲しみましき。わが身を翁になぞらへいはんはおほけなき業なれど、廿才にてうせにし倭文子と、十八にて身まがりし愛子とを思ひくらぶるに、師のひが目にもやあら

む、愛子の文は倭文子に遠く及ばねど、歌はさばかりおとれりともおぼえず。昔も今も才ある女の、いかでかばかり幸なかるらむ。心なの春風は、など此つぼみの花をさそひにけん。心をこめて數へし萬葉集は、七の卷にして、未だ數卷を殘せり。あはれ天なる愛子の靈よ。飛鳥の舊都の歌をめでゝ打ずんしつるいましの聲は、今もわが耳にやる心地す。されど愛子は今や世にあらず。松一本秀でたてる此古寺の奥つき所に、玉川の流の音を遥にきゝつゝ、こゝをしも千代の安眠の床として、永き眠りに就かんとす。あはれいく千萬言くりかへすとも、此悲しびはつきせじ。あはれ天なり命なり。今は唯、いましがよみいでし歌の數いまだ少なく、あや錦其半だに織り出でずといへど、千代田集に、明治歌集に、撰びいれしいましの歌の高き調秀でたるふしを、後の世の人のあはれとみん事もあらんを、千代の形見、せめてもの慰さめ草と思はむ。子の如くはらからの如くに教へ導きし師が、かくばかり歎き、かくばかり惜みつゝ今よみあぐる此詞を、愛子の靈よ、天がけり來つゝきけ。あはれ悲しきかな。あはれいたましきかな。

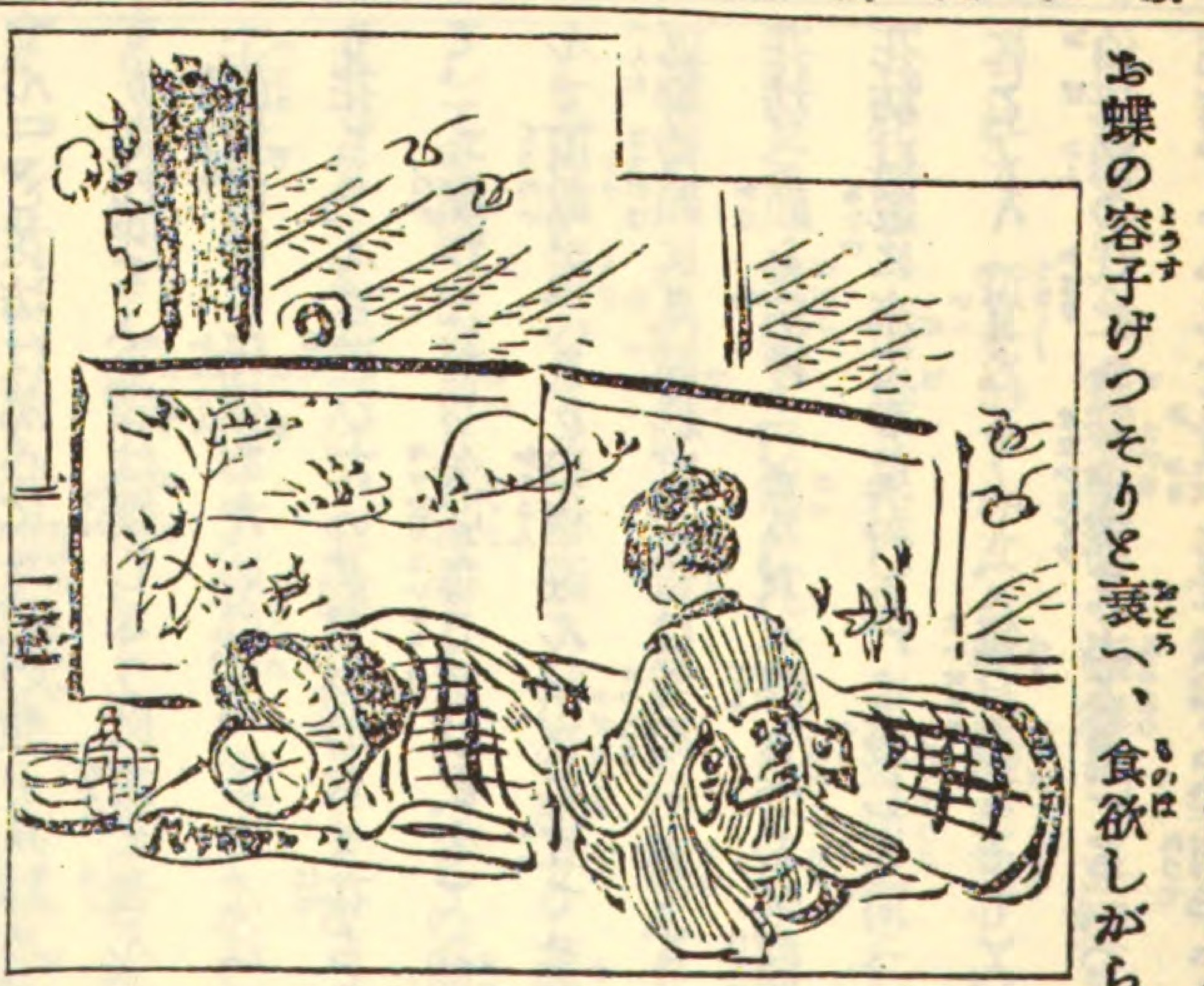
明治廿九年一月十五日　橘樹郡御幸村の寺院にて

この友

箏生

小春日和の麗かさに、庭の築山の上の芝生に、お供達の花坊、しかも二人とは無き懇なる花坊と、面白さうに遊び戯れ居たりしお蝶、日影傾むく頃獨り茫然と椽側から上り來り、切に咳を仕ながら母の傍へ居り「母樣あの子あたいネ、何だか酷く寒くッて、そして頭が痛くなつて來たの、おあんばいが惡くなるんじや無か知ら」と心配さうに母親の顔を眺めるに、母もお蝶の顔色の晝前と變りて常ならねば「オヤそうかい困つたネ、でも直に治るだろうヨ、お前チヨツクラ母樣の傍へお寄り」とお蝶の手を取て己が膝の邉へ居らせ、お蝶の額へ手を當て見て、心から驚き此熱の酷いと、是

では直にお醫者樣をと、腹の内で呟きつゝ「お蝶や、お前お夜食を喫てネ、そして温にしてお寐なさい」と何氣なき躰に輕く云へど、お蝶は中々苦しさに堪へやらでや、可愛らしき手に額を押へてうなだれつ「あたいお飯は喰たか無の、夫よりか早く寐かして頂戴ナ」「ジヤ直ぐ寐かして進よう、そして御飯が否なら葛湯でもお呑ナ子」と母は跪きてお蝶の肩を後から兩袖に抱え込む樣にして、横から覗きこめば「だツてもあたいは何にも呑たく無くツて」と顔をしかめてヂツト倚り掛れば、母は餘義なき顔付して「お飯も否葛湯も否そりやア困ツたネ、そんなら直に寐かしませう」と下女のお松を呼びて床を取らせ、お蝶を勦りつゝ寐かし終れば、日も早や入相の風寒く、塒に急く鴉の聲も常より寂氣に聞えぬ、母は女の常とて案じ立に氣は重苦しく、力なき膝をやをら起して、夫の歸りに間も無ければ、夕飯の仕度やら、醫者を迎へる用意やら、お松相手に立働くうち、主人も歸宅すれば早速お松を醫者へ走らせ、其間に夕飯も急ぎ濟せれば、頓て醫者も來りて、お蝶を診察し格別の事も無ければ御心配には及ばんと、夫妻を慰めつゝ、四方山の話もそこ〳〵に、亦見舞ふ由を云殘して歸往ぬ、



翌朝となれば、ゆふべ夜びての絶間なき咳に弱りてや、お蝶の容子げつそりと衰へ、食欲しがらぬばかりか、口さへ碌々利かねば、主人の會社へ出勤せしあとは、母獨りいとゞ心細く、色々仇なる迷氣さへも出て、もしや此儘冥土へ杯いふ、忌

はしき疑ひも胸に浮べば、お蝶の脊撫やる手さへ、知らず〳〵たゆたふ折しも「蝶ちやん何所に居たの」と勝手の揚口から元氣よき例の花坊の聲、フト心付て「オヤ花坊か早いのネ、アノ蝶ちやんはネ、おあんばいが悪いッて昨日から寐て居るの」と云ふを皆迄聞かぬ内に、いそ〳〵あがり來り「アラ伯母さん、本當に蝶ちやんは、おあんばいが悪いのネ、お脊中が痛いの」とお蝶の枕邊に廻り、首傾けて顔差付れば、お蝶は見上て淋しき笑を洩らし「イ、エ、お脊中じや無の、あのネ」とあとを云出んとして、少し躰を動かすトタン、こみ上て出る咳に遮られ、涙ほろ〳〵苦む躰に「アラ大變にコン〳〵の出ると、蝶ちやん苦しか無かエ、何故蝶ちやんはおあんばいが悪くなつたの、蝶ちやんがおあんばいが悪いたッて、あたいは只一人で遊ぶのは否だ、蝶ちやん早く能おなりヨ、早く能なつてそして又あたいと一緒に遊んでお呉ヨ、後生だからヨウ蝶ちやん」と花坊は熱心にお蝶の顔を見詰め、返辭待顔にすり寄れば、お蝶は嬉しさうに笑を含んで、母親の方へ顔振向け「母樣あたいはネ、おあんばいが悪くッても花ちやんと遊びたいワ、がからネ花ちやんにさう云て、お願ひだから矢張毎日遊びに來てお呉だやうに賴んで頂戴ナ、ヨウ母樣遊んだッて宜でせう」と是も亦返辭待顔に見詰れば、母は莞爾「ア、さうだネエ、と花坊へ顔を向け「どうだエ蝶ちやんが寐して居ても、花坊は遊に來てお呉かエ」と優しく問へば、花坊は早にこ〳〵「宜とも〳〵、毎日來てそしてネ、あたいが伯母樣の代にお脊中擦て上るワ」と云つゝ嬉し紛れに花坊、おかしな身振を仕ながら、両手で己が袂を膝の上へすくひ揚れば、其拍子に袂からコロ〳〵と、五ッヲの密柑が轉がり出るに、花坊ハット愕り仕て「アラ、あたい本當に忘れて居たの」と笑々拾ひ集めて、チンマリとお蝶の枕元へ供へるやうに並べ「是はネ、内

の母樣が蝶ちやんにお上よツて寄したの、蝶ちやん一ツ食て御覽ナ、本當に甘いからサ」と顏を覗けば、お蝶も熱に乾きし口とて、水欲き時なれば「アラ赤いのチ、有難うョ、母樣一ツむいて頂戴」と云ふを花坊傍から一ツ取て「宜ョ、あたいがむいたげるから」と老實〳〵敷く慰め呉るに、お蝶は云ふ迄も無く、母親も嬉しさに、年端も往かぬ花坊ひとりを、能き力草と賴まるゝ心地せり、

されど其後、三日たち、五日暮れ、十日過れど、お蝶の容子の少しも快からぬ而已か、唯じり〳〵と重り往くばかりなれば、流石にぶく〳〵愛らしかりし頰の肉も、齧と共に消え失せて、圓々と太りたりし腕も、いとゞ細りて衰れ氣に見ゆる抔、遉れ名醫が周到なる施術も、慈悲深き兩親が殘るかたなき篤き手當も、今は早何の甲斐なき有樣なりけり、

去りながら、唯一ツの心恃みは、花坊のまめやかなる慰め振なり、生の親さへ此日頃の看護に、稍氣力の衰へたるに、物に屈托せぬ子供なればや、欝陶しき一間の内に倦もせず、今日も朝から氣輕な調子で、曾て母と添寐に時々聞されしあどけなき落し話を、忘れし節もなくすらすらと、作り聲さへ交へて、面白く語り聞かせるなど、無邪氣なる振舞に、お蝶も心尋りは慰められて、折々かすかなる笑ひ聲を洩しぬ、

「花坊や、伯母さんはチ、お臺所に少し御用が有んだからチ、美味くは無けれど、是を食ながらどうぞ蝶ちやんと、今の樣にお話でもして、遊んで居て頂戴ナ」とお皿に栗のキントンを、山程盛りて其所へ置き「そしてお蝶、お前も好子チエ、ちつとの間だから待ておいでョ」と云へば、お蝶は默ツてうなづく、花坊は一寸辭義して「伯母さん有難うョ、よツく遊んで居るから、伯母さん澤山御用していらツしやいョ」と輕い辭に「ヂヤ、ちつとの間お願だよ」と伯母さんは襖の外

へ出て仕舞へば、あとにお蝶は、力無き首を漸々に擡げ、花坊の退屈せんを氣遣ひてや「花ちやん、キツトソ美味さうだからお食ナヨ」と口を利けば「ハアあたいも食るから蝶ちやんもお食で無か」と花坊も勸めるに「イヽエあたいは食たか無の、花ちやん獨で澤山お食ヨ、たんと食てそして丈夫に仕て居なくツちや、あたいの樣になつて、お仕舞に死んだとサ」と云へば「だから蝶ちやんも、お食ナと云ふんじやないか」「だツてあたいは食たか無もの」「それだツて今蝶ちやんは、澤山食て丈夫に仕て居なくツちや、死ぬんだなんて云たじやないか」と花坊に詰られて、お蝶は少したじろぎ「でもあたいは」と云かけて、一寸考へる風に目を閉りしが、旨い二の句の出兼てや「花ちやん、モウあたいは其樣なと知ら無ヨ」と顏を隱すに、花坊笑ひながら「そら御覽ナ、蝶ちやん負たろうじやないか」と顏を覗きに摺寄れば、お蝶は堪らず「ア、宜ヨ、あたいが負たんだヨ、だからモウお意地目で無のヨ」と漸く顏を出し「それじやア花ちやん、あたい聞くからお教へナ、あの花ちやんはヨ、死だとツて有かエ」と問かけるに、花坊是には驚かされ「アラ何だヨ蝶ちやん否な人だヨ、あたいは死だとなんて、一遍も有りやしないワ」と笑へば「ジヤ死てエのは如何に爲んだか、知といでかエ」と亦むづかしい尋ね樣に、花坊いよ／＼困らされ「アラ亦そんな……あたいは如何だか知らないヨ、だけれどヨ、死ツてエのはお墓の下へ埋ツて、遠くの遠くの、本當に遠くの方へ往て仕舞てヨ、それツ切でモウお内へ歸るとが出來なくなるんだとサ、本當に怖いヨ」「ジヤ花ちやんは、死のは嫌かエ」「アラ蝶ちやん、死なんてエと誰だつて嫌じやないか、怖いもの、だから蝶ちやんも早く能おなりナヨ、能なつてそしてヨ、ホラ何時かの樣に、アノホラ何時かの樣に、伯母樣だの内の母樣だのと、一緒に上野へお花見に往

ッてサ、博覧會だのそれからアノ何だッけ、オ、そうだッた動物園サ、本當にアノ時は面白かッたッけ、そらアノ大きな象がやさしい顔してサ、にゆーッと、そら此様に」と花坊自分の右の手を突出し「蝶ちやん御覧ヨ、そら此様に鼻を伸してサ、そしてお煎餅なんか鼻の先へ狹んで貰ッたッけ、ネエ蝶ちやん覺えて居るだろう、それからアノ虎だの、鶴だの、狸だの、色々な面白い物を見てサ」と一寸考へ「ア、未だアノそれ鴛鴦サアノ鴛鴦が二つで面白さうに遊ぶのを見て伯母様がサ(アノ鴛鴦の仲の好よ、丸でお蝶と花坊の様だ)なんて、あたいの母様と二人で笑ッたのヨ、本當にあたい面白くッて〳〵、何時迄も居たかッたの、だから又彼時見たやうにネ、皆と一緒に往て見たくッてヨ、蝶ちやんも矢張往て見たいだろう」と罪の無き望をほのめかせば、最前から靜に聞居しお蝶、眉根ひそみし額を、細りし手におさへ、しほれ反りし顏付して「あたいも往たいけれどネ、おあんばいが治らないから」と、しよんぼりするに、花坊連りにもどかしがり「何だネ蝶ちやん、そんな顏するもんじや無いの、おあんばいなんてモウ三ッも寐ると、直に治るヨ」とお蝶の浮立たぬが、氣に懸かるやら、兎や角と機嫌を取り居たりしが、暫く立ちて亦何事をか云出さんとして、フトお蝶を見るに、額おさへし手は其儘に、勞れし爲かすや〳〵と眠り居れば、話相手を失ひて花坊淋しく、貰ひし栗二ツ三ツ食しが、是も亦いつとは無く横になりて夫なりけりに眠り就きぬ。

お蝶の母は臺所の用の概畧きまりたれば、後は下女に任せて急ぎお蝶の部屋へ入來りしが、見れば花坊は座布團の上に轉がりながら、頻りに兩手を伸して、物摑む様子をし、赤口をモガ〳〵させて、物云んとする素振をなすに、おかしいやら薄氣味悪いやらで突立た儘、聲もかけず起しもせず呆然と眺め居れば、今度は出し

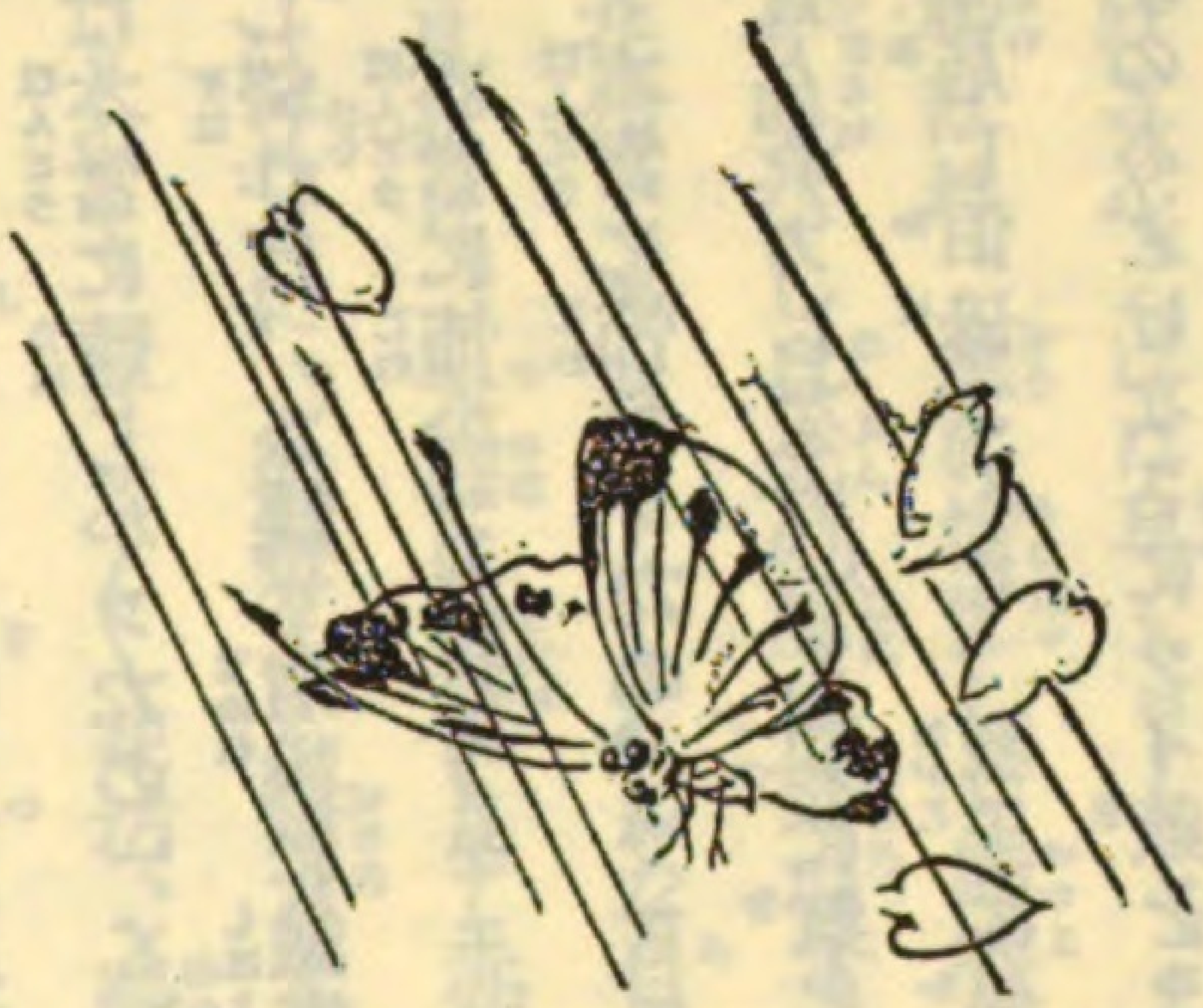
扱けに「アレ〳〵、おおおばさん、はは早くョ〳〵、アレ〳〵」と大きな聲で泣叫ばれ、急に慌忙しく駈寄りて、抱起そうとすれば、今叫びし自分の聲に驚かされてか、むく〳〵と刎起る花坊、キョロ〳〵とした目に、我が前なる伯母さんを見付け、矢庭に飛付きて亦大聲に「はは早くョ」と叫び立るに、伯母さん驚きながらしッかり抱えてゆすぶりつゝ「コレ〳〵花坊、夢だョ〳〵、コレ花坊やしッかりお仕ョ」と氣を付ければ、花坊漸やく目を覺し、不思議さうに其所等を見廻し、今の騒に呼覺されて、訝しさうに眺めて居る、お蝶に目をとめ「アラ蝶ちやん、矢張此所に居たのネ、オ、嬉し」と仰向て伯母さんの顔を見「伯母さん、あたい今ネ、夢見たの、本當に〳〵怖い夢だッたの」と肩で息するに「オヤそんなに怖い夢見たのかエ、でもモウ覺たから大丈夫だネエ」と伯母様は笑ふて、花坊を膝より下せば、最前から花坊の容子に、目を離さざりしお蝶は、細き聲ながらも聞しさうに「怖い夢ッてどんな夢、花ちやんお聞かせナテ」と問口を掛れば、花坊は得意顔に「宜とも、ヂヤ話すからお聞ョ、其夢ッてエばネ、あたいと蝶ちやんと只二人でネ、お花見に往たのサ、すると大きな勸工場が有てネ、そこで學校行きのカバンだの美しい本だの二人で買たの、それから早くお内へ歸つて、父様だの母様に見せるんだッて、二人で出て來ると、どう仕たんだか廣い淋しいお墓場へ出たの、そうすると蝶ちやんがネ、あたいは死だのだから、花ちやん丈け一人でお歸りよッて、あたいのとを搆はないで、ヅン〳〵と向ふの方へ往ふとするの、だもんだから、あたいはネ、蝶ちやん死だのじや無から一緒にお歸りよッて、蝶ちやんを引張うとすると、横の方から大きな象が出て來てネ、蝶ちやんをヒョイと鼻の先へ引懸たの、だからあたいは一所懸命に石を拾ッて打付たの、そうするとネ、知ら無い内に

象の顔が無くなッて、今度は角の生へた怖い伯父さんの顔になッて、滅法大きな眼玉を剝て子、蝶ちやんは已が喰て仕舞ふッて、あたいの顔を白眼たの、あたいはモウ怖くッて〳〵、堪ら無から、一所懸命に、本當に一所懸命になッて、伯母さんヨー伯母さんヨッて、大きな聲で呼だの、すると伯母さんが其所に居たから、直とあたいは伯母さんに飛付て、蝶ちやんのとを云付ようと思ッて、其所等を見たら、矢張り蝶ちやんは寐んね仕て居るし、伯母樣もあたいも子、矢張り此所に居たもんだから、あたいは本當に嬉しかッたの」と花坊唾を呑み〳〵熱心に話し終れば、お蝶も眉根に皺寄せて「それじや花ちやん、本當に怖かッたろうチエ」と慰める樣に云へば「ハア本當に怖かッたの、でも子夢だッたからモウ何とも有りやアしない」と別に氣にせぬあどけなさに、傍で聞居し伯母さんも、我子に係る忌はしき夢ながら、花坊のあどけなさにツイ氣をまぎらし、其儘笑ふて仕舞ぬ

其後、同じ樣なるいぶせき日を五日計り送りたりし夕べお蝶の容子いよ〳〵惡く所詮此方らの物とは思はれぬ有樣なるに、父母をはじめ花坊の母なる人も來りて枕邊に居並び、お蝶の上を兎や角とひそ〳〵打語らふ其面の、孰れも憂ひを含めるに、元氣者の花坊も、何となくしよんぼりと、母の隣に居づくまりて、唯ジロ〳〵と、人々の顔を見競べ居たり、

今迄仰向に寐て、細〳〵と微かなる息繼き居りしお蝶は、そよ吹く風にも堪やらぬ、瘦勞れたる躰を、俄にむく〳〵と搖動かし、俯伏に寐反り打つよと見る間に、力なき咳二つ三つ、アッと云さま躰をもがけば、ゴボ〳〵と音して紅鮮なる血の塊り夥しく出でぬ、此光景に一座の人色動きて、ソレお醫者をと下女を追立てるやら、ソレ藥と騷ぐやら、中にも母は目も眩むばかりに驚き、直樣我膝に抱上げ、わなゝく手を我か

ら愼めて、脊中など撫遣れば、暫らくしてお蝶はやゝ落付たりと見えて、靜に目を開き母の顏をしみ〴〵と見詰め居しが、何事か物云ひたげに、再び三たび唾を呑やり、亦暫らく見詰めて漸やく口を開き、いと絕え〳〵なる聲に「母樣……あたいは子……モウ死ぬの……だから子……亦あたいをば產て頂戴ナ……あたいとチットも違はない樣に子……お願ひだから產で下さい子……ヨウ母樣……父樣にもそう願ッて子」と、うるみし目に無量の思を込めて、母の返辭を伺ふに、脊撫でながら咽び〳〵聞居し母は、辭より先づ悲しさに胸塞がり、顏もえあげず犇とはかりに抱〆て、お蝶の頰に我が頰押あて、齒を喰しばり泣沈



めば、父なる人も淚こそ見せね、頸を垂れ腕拱きて默然たり、花坊の母も女氣の、同じ情に目をしばたゝきつ、顏を背けて淚拭ひぬ、先程より花坊は此塲の光景に膽奪はれて、茫然と目を丸くして居たりしが、今お蝶の母に向ひて、其身の死るとを告げ亦其身の產で貰はんとを願ひしに、心動きてや、ツト伯母樣の傍へ寄り、お蝶を抱〆て俯向て居る肩を、怖々搖動して「伯母樣……伯母樣」と沈みたる調子で呼試みぬ、花坊に呼ばれて伯母樣は、無言で淚の顏を上げ、振向きさまに花坊の母と顏見合せ、其人の泣赤めし眼邊に胸潰れ、又急に俯向けば、花坊も子供心に何となくうら悲しくて、稍ためらひ居しが、云はで叶はじとや心定めけん、思切りて伯母樣を呼び「伯母樣や、今蝶ちやんが云た樣に、蝶ちやん死でも亦產で下さいョ」と肩をゆすぶるに、母は堪り兼て「何だ子お花、お前はそんなとを」と窘めて、夫婦の前氣の毒さに、己が膝へ抱すくむれ

ば、花坊不興顔に「デモ蝶ちやんが願ッたから、あたいもソウ願ッたの」と唇震はしぬ、母に抱れて目を閉ぢ居しお蝶は、又徐ろに口を開き、微かな聲に先の言葉を繰返し「花ちやんもあんなに云てお呉れだからサ」と云加へて、母の顔を見護りぬ、

今迄默然たりし父なる人、俄に拱きし腕を膝に下し、嚴に搆へ決然たる調子にて「お蝶モウお默り、お前の云ふ通り此父樣が承知した、お蝶の通りの、お蝶を産でやる」と暗涙を呑んで云放ち、直ぐ妻に向ひ「何時迄もお蝶を苦しめるんじや無い、早く返辭してやれ」と勵まされて、ハイと頷き、早是迄と覺悟をなして、湧出る涙拂ひも敢ず、わなゝく聲振絞りて「お蝶や……母樣も承知した……産であげるヨ」と、云捨て抱きあげ、身も世もあらで泣潰れぬ、是を聞てお蝶は、微かなる笑を浮べ、細き首を伸して人々の顔を見廻し、頓て霜夜の虫にも似たる聲音に花坊を呼び、ソッと瘦からびし自が手を伸せば、母に敎えられて花坊も、可愛らしき手にお蝶の手を握れば、お蝶は幵を握り反して、其手に微な力を込め「花ちやん……又遊んでお呉れ」と光り無き瞳を花坊の顔に注げば、花坊も顔を見返し「宜とも、だから早くお産でお貰ひヨ」と答ふるに、お蝶はさも心地よく頷き、握りし手を放すと其儘、覺めぬ眠りの夢路に入りぬ、（終）

擬世の中百首

世の中に世の中百首と云歌草紙あり世の中といふ句を歌言に置て世の中有べきさまの理を能讀つらぬ世の中の人を敎へたる世の中の重寶なる書也今又それに擬へて讀けるものか更になるへくも非すいと愚なる歌ともにて恥しけれとも我らも愚かなる子供にとらせんとてつれ〲なる折のすさみ也本の百首は伊勢の渡會の神主荒木田守武と云る萬に賢き人大永年

中秋之頃庚申之夜一夜讀して奥書に見へたり此百首は其人の才敏もなければ思ひ出るにまかせて一ツ二ツつゝ讀にける諺言と知るへし　葉庵子鐵心

擬世中百首（上）

本歌　鐵心
詠歌　信翁

世の中は唯何事も同じ事
　思ひなしから違ふものなり

同し事と見るは公け心にて
　違ふと見るは僻目なるべし

世の中をしはしの旅と思ひつゝ
　杖と笠との身社安けれ

世の中を厭ふ心にさそはれて
　輕きを安く思ふなるらん

何事も馴れはくせに成ものそ
　くせもなるれは直る世の中

馴るゝとは唯よき人に交りて
　我意を忘れよ世の中の人

世の中は替る習ひの飛鳥川
　きのふの淵も賴れぬかな

ともすれは賴むそ愚かむかしより
　替る習ひは人の世の中

我心誠を得れは世の中は
　有にまかせて靜なりけり

誠とは思案工夫をはなれつゝ
　自然と直に見ゆる心そ

世の中にあらゆる人は替れとも
　獨り守るは道しれる人

道しれる人はありとも愚かなる
　目に見へかぬる闇の世の中

世の中の憂時つるゝ友こそは

是そ心のまことある人
古への敎を學ふ人あらは
今もまことの道はまよはし
世の中は賴みなきそと知ならは
替るにつけて何か恨みん
替る時人を恨みぬこゝろをは
兼ては寛く太く持なん
何事も捨れは安き世の中よ
取付いて身を苦しむる哉
世の中の願ひ望の多けれは
捨るこゝろを忘れ社すれ
世の中の事は善あし何事も
我のみ知て捨て置くへし
善惡を知て捨てさる鼻のさき
あらはれ渡る人は見苦し
世の中の事は難波のよしといゝ
あしといふなるものと知るへし
墨くせを手に持ずして難波なる
そのよしあしをいかで分たん
用あれは親しむものぞ世の中は
用過て後うとく成るなり
疎く成人は浮世の習ひぞと
思ひ流して身をかへり見よ
世の中を渡る舟路は急ぐとも
待ば追手の風も吹くなり
待もうしいそくもつらし世の中は
風のまに／＼櫓をおしてゆけ
世の中の事業しげ／＼隙なきは
是何故と能かへりみよ
隙もなき浮世としらば何故と
思はずしらず心休まん
一切を知は則佛にて

　認るは凡夫人の世の中
誠あらは佛の智惠を羨まし
　認る心もよしや世の中
世の中の萬の事は人任せ
　我を立つるは只ひとつあり
一ッ有此一ッをはいはしたゝ
　心に悟れ世の中の人
たちまちに間に合はさるは世の中の
　用に立さる事と知るべし
何事も兼て備への無人は
　行當りてや耻をかくらん
世の中の名劔名馬といふとは
　刄早く足の早き德なり
世の中の事にはよれと大形は
　早きに德は多きとそきく
世の中に大器は遲く成るといふ

　是は自然の功をいふなり
其功を積たる人はおのつから
　世の重寶と成ぞ尊き
世の中は目の子算にて渡るべし
　小割の算はけく違ひ有
利發者の割を算のけた違ひ
　其誤りは歸一倍哉
世の中の賢き人の敎をば
　能味へば皆目の子算
世の中は積りに合ぬ事ぞ多き
　早算用は三五十八
樂みの有を待えて樂まは、
　たのしみもなき人の世の中
目の前の樂をばまらで行程に
　死て十萬億の極樂
悟得し眞空妙有も紅の

糸一すじは殘るものなり

我道にあらぬ敎は其道の
智識に逢て尋問ふべし

足まとふ紅の糸一すじを
踏切て見よ人の世の中

是れも亦佛の道の敎なり
好は知たる人に尋よ

世の中の理屈は山よ哀きは
啼虫よりも螢なりけり

人情をさらすはいかり口さきの
理屈はかりは合ぬ世の中

手の奴足の乘物世の中は
費なくして自由なりけり

是は是れ世捨坊主と思ふなよ
奢を省く誠の歌

世の中の道を知らんと思ひなは
日に孝經を三度讀へし

眞實の心はなくて孝經を
幾度よむも益は有まし

世の中に格外はなし格外は
格の本をそ格外といふ

格を能習ひ熟せは自から
はなれて合ふ道を知へし

賴むなよ盛の花の身なりとも
移るはやすき人の世の中

歲若く位は高く家は富
千代萬代と思ふはかなさ

親めよ常盤の松の霜を經て
葉かへぬ人も有は世の中

横につく目にては見へぬ奥山の
松の常盤の雪の曙

人はたゝ油斷大敵世の中に

烏の怖る矢も有と志れ
此四字は古へ今に至るまで
我身を守る要なりけり
時により抜けさる太刀の高名も
あれは有なり人の世の中
事になれ功を積たる人社は
變に應する智惠も出なん
世の中は落馬して雉を取そとて
度々落る人はなきかな
過ちの高名になる仕合を
又有へしと思ひけるかな
世の中の秘事は睫とたとへたり
とかく大事は目の前に有
睫とは近きたとへを知すして
道はいつこと夕やみの空
世の中に酒に酔るは常の事
茶に酔ふ人もあれは有なり
茶に酔る人には懼よ世の中の
覺てね入れる耳そおそろし

談叢

佐久間象山の少時

松琴生

象山幼名を敬之助と云ふ、卓犖豪放常に高山深谷を跋渉することを好む或る年の夏同輩兩三人と戸隠山に登る、羊腸九折の細道をたどりて漸くにして奥の院に達す、九頭龍權現なるものあり、導者少年輩を誑かさんとして曰く「是靈現なる生神にして日に米一升を食ひ盡くす君等一升の價を献せば社主代りて之を奉ぜん」と敬之助反問するに其現身の如何なるものなるを以てす彼云ふ「是れ九頭の龍蛇にして其尾後峯の麓に出づ」

と敬之助大笑して曰はく「斯く大なる神躰にして豈僅僅一升の米にて能く其饑を醫せんや是社主の詐者を欺きて以て自ら利するものなるべし」と彼愧然として亦語を發せず、少年等猶後峯の頂に上らんとして進む岨道に沿ひ小徑を登り、葛蘿を曳き老松の間を行き遂に白雲の裡に入る、導者其困苦に堪へず辭して去る、進むに從つて山愈險谷益深已に鳥聲なく亦獸跡を止めず、時に陰雲漠々として冲天を蔽ひ將に雨ならんとす。相議して曰はく「天漸く曇翳眺望に宜しからず、風景を賞するを得ずして空しく降雨に苦しめられんは策の得たるものに非ざるなり、早々歸路に付くに如かず」と相同して山を下る、往くこと少時忽ち大雨一點二點益烈しくなりて終に篠つく大雷雨となり天地晦冥亦咫尺を辨ぜざる程なり、相皆呼應して馳す、敬之助如何にしけん、遂に友を失ふ其己れの先んじたるを思ひ松樹の影に佇立して待つ、隻影を認めず只電雷の谷間に反響する凄しき聲を聞くのみ、玆に始めて路を誤りたるを知り急遽路を求めて去る、而して再び路に迷ひ日全く暮れ進退殆んど谷まる、會ま古びたる社殿を發見し喜んで入りて憩ふ、社內先きに人ありしものの如く焚き殘したる、薪木若干あり、燧して漸くに之を焚き、衣を乾かし、殘食を喫ひ、元氣始めて復す、忽ち睡氣を催ほしたれば刀を枕にして睡むる、鼾聲雷の如し、夜深更山賊二人社に宿らんとして來る、其人あるに驚き逡巡して入らず。其少年なるを見刀を奪はんとして身邊に近づく、啓之助覺めて之を誰何す、賊山刀を拔きて之を脅迫す啓之助應戰せんとして思へらく草賊の爲めに刄に衂するは屑からずと有合ふ薪木を以て向ひ足を打つて一人を倒し腕を捻ぢて他を倒す兩々相縛して柱に繫ぐ、賊泣いて助けんことを求む彼肯かず賊に語りて曰はく「我汝等を殺すは易し然れども刑を主どるは我の職に非ず、宜しく捕吏の來るを

待つべし」と墨斗を出し白板に罪狀を大書して優然として歸路に就く嗚呼彼一個の少年にして大膽にして細心なる焉ぞ能く如斯なるや、後一身を以て天下の重きに任じ眼光世界に徹せし象山先生たる亦た宜ならずや。

那須の面影（中）

湖處子撰

今日はあれ日とて、何國の里にてもいかゞあらんと、思ひ煩ふなるに、今朝の雲行いと速く、後には風もや出でんと、いとゞ心ならず思ひしに、辰過る頃よりそよ風のみ、さしたる事はなくて靜なる風情、實にめでたし。

宿の外れに月山寺といふ寺やり、宗旨は聞もらしぬ。去る年の燒失後、建前ばかりにて、未だ屋根も出來ず、根太も張らず、其傍に行者の小屋あり、脇に垢離取る流れあり、上に大なる石燈籠あり、そが傍より殺生石、賽の河原への道あり、一丁半程行て、賽の河原は悉く硫黃石のみ多し、小流を踏こえてのぼれる也。側らに小小き地藏尊の石像を大なる石の上に安置す。石を透間なく積重ねて塔の形をなす。多くは女、童の業ならんかし。其山際に硫黃とりたる穴にや、ふすふすと煙の立ちのぼる穴あり。伴の女は登りて見たれど、我は下駄にては物うきまゝ行かで止みぬ。此邊すべて別世界の趣あり。

夫より二十間も登りて、殺生石あるよしにて、埒結ひ廻したる中に同じ形の石數多あれば、孰を指して然か云ふや、更に判たず。兎に角にして立ち歸りぬ。

宿の向ふなる酒賣る店にて、醉漢の三人ばかり、何爭ひけん、わめく聲雷の如く、牛の吼るに似たり。

同二日　晴

今日は未明より女商人馬引つれ、野菜物ひさぎあるき、

聲高やかに客人を勸むるさまいと賑はし。
加倉井村の藤右衛門に餅を貰ひて、そが酬に玉子を送りぬ。

たま〳〵にあへど玉子の如くにて
きのふもけふも丸きつきあひ

辰過る頃、武州鴻巣鳳玉といへる俳諧師來たり、初めて逢ひ侍る。俗稱榮次郎と申す由。

黄昏や海へ押出す花の雲
飛飛の水田あるかや燕子
十六夜や今朝見た月と思はれず
世を捨し身にも師走の用事かな

右四句持句のよし、書て見せ侍り、未だ三年ならでは學ばざるよし、幼俳に見ゆ。おのれも三十年餘り樂しみ侍れど、未だ實境を知らずといひ侍りしに、臆してや、言句も出ず、雅帖を認てよと出しけるまゝ

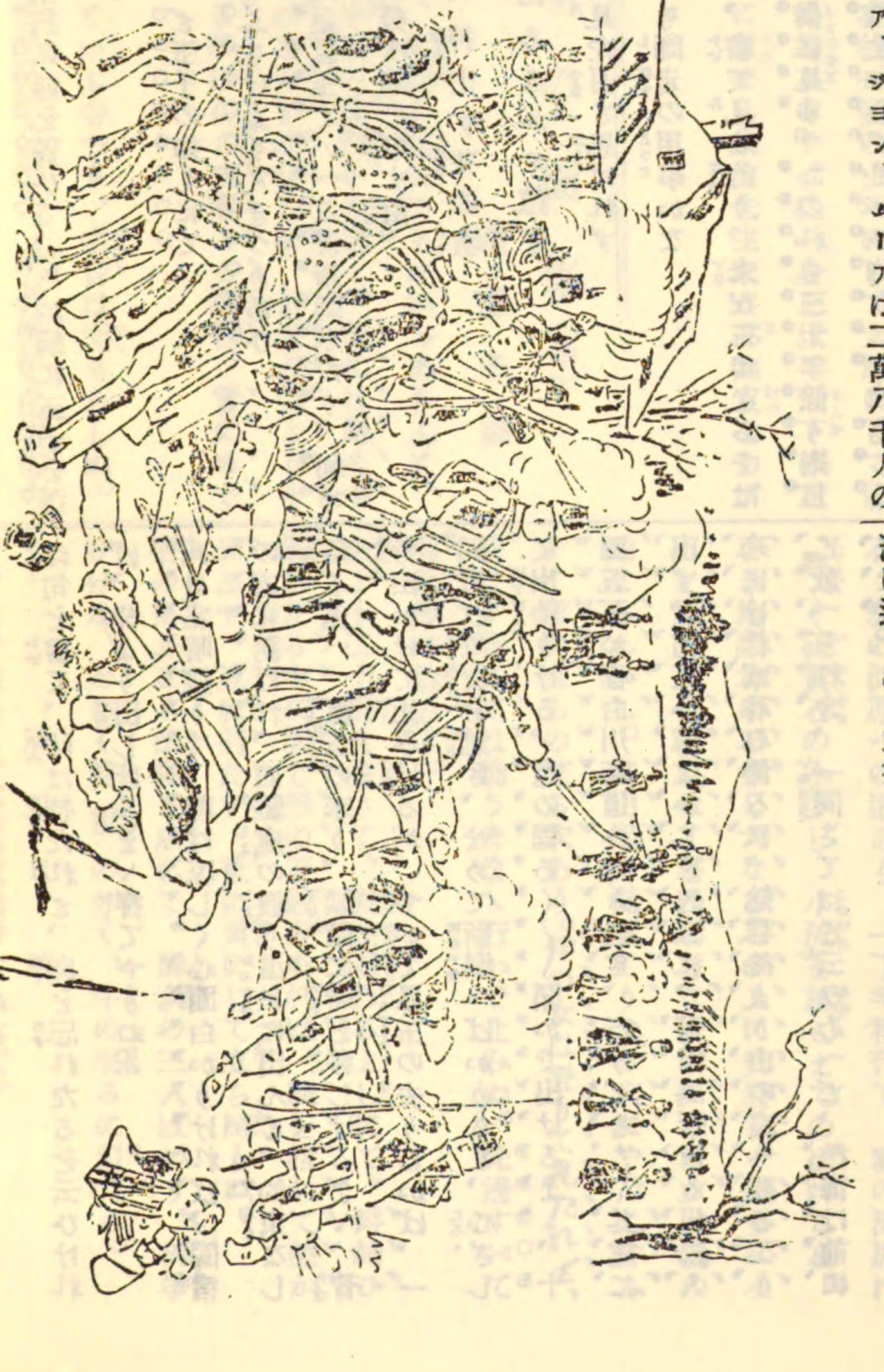
程々の香はあるものぞ草の花

此句を書て、印は持たれど、肉を忘れたるを云ひければ、先より出しけるまゝ押てやりぬ。

此日空晴渡りて、朝は涼しく心面白かりければ、同宿の友に誘はれ、四個處の渡り温泉に出んと、約束なし侍る處へ、鳳玉の來り、談話に時を移しけるまゝ、皆皆出かけて止みけるが、やがて鳳玉の去りしかば、一同再び支度を急ぎ、せめて新潟へばかりもと、心ざして出侍りける、道の程ろく〳〵聞かで出けるまゝ、十四五丁が程白川街道へ行き過ぎ、行けども〳〵其處に出ず、何人か來よかしと思ふに、荷附馬牽ける男二人來にければ尋ね侍るに、餘程後より山の左へ登るなりと教へられき、一同さてはと云ひあへど、後悔は前に立たず。

世界戰爭畫報(四)

千八百八年十月サア、ジョン、ムーアは二萬八千人の英軍を率ゐスペイン軍を救援せんとリスボンより進軍し、佛軍と會戰の後、西國コロンニヤ港に退却せんとしたるに降雪積雪により道路頗る困難なりしため、英軍利あらず、佛軍追擊し、英軍夥多の捕虜を出せしも、返り擊ちて捕虜を回復し、遂に千八百九年一月十四日同港に達しぬ、此役ジョン、ムーア戰死



家政

楠公の遺訓　K　K

凡そ訓言は短かく覺えやすき語に深き眞理を含むものにて、之を小供に暗記せしむれば、德育の一助となるものなり。世に楠公遺訓として傳はれるものあり。其言に、

○己れが分限を能く知りて、極樂を願はんよりは、地獄を作るな。
○樂を好めば苦多し。
○譽を求めんより誹を厭へ。
○珍事は實少し。
○酒は呑むとも呑まるゝな。
○慈悲はするとも代りは取るな。
○足る事を知りて、及ばぬ事を思ふな。
○物事は肝要を知るべし。
○居所は風雨を防がん爲なり。
○文字を書かば讀める樣にかけ。
○物を言はゞ聞ゆる樣に言へ。
○舌は柔かなる德によりて全し。
○齒は堅き德に依て全し。
○他の事を言はんより、自らの非を知れ。

此等の訓言を母親より嚙みくだきて、面白き事實譬などを引き、懇ろに小供に含ますれば、益多かる可し。

朝起　同

「一日の計は朝にあり」「朝起は人をして健康に、金持に、智慧者にならしむ」などいひて、朝起は勉强の代名詞となり居るなり。

此は皆人の知る所なれど、偖此頃の樣な寒い時候になれば、何時か知らず〳〵床離れの仕にくきものにて、

朝寐する癖つき易きものなり、此處は主婦の氣をふり立つべき所なり。朝起の健康に益あるは言ふも無益にて、或學者の説に世の中の言ひならはしに朝起きて東に向ひ日輪樣を拜む者は長生きすといふも、知らず〳〵此衞生法を實行するものなりといへり。朝起の家の締に大事なること、仕事の捌けに肝要なることは、是亦言を待たぬ事にて、西洋の諺にも「よく始めし事は、半ば成就したるものなり」といひ、朝早く起き朝飯を手まわしよく片付れば、終日手順よく萬事都合よく、もし朝に於て一二時間遲延することあらば、終日仕事に追はれ、用事捗取らぬものなり。まことに此朝起といふ事は、家風の興廢にも關するものにて、凛々しき家庭と、ぬらくらしたる家庭との區別も、手近くいへば斯る所より起るものなり。昔しより大將の遊びて勝ちたる軍なきと同樣、朝寢の奥樣に下女の取締、子供の取締、家風の興起は出來兼ぬるものなり。やゝ大きくなりたる子供などは、防寒の用意は十分にして置きて、成る可く早起の癖をつけしむるをよしとす。或經驗ある小學校教師の話に、學校の課業時間におくれ來る生徒に限りてしだらくにする癖ありと。斯る生徒の家を尋ぬれば多くは評判よからぬ家庭なるべし。此は子供の恥



北極旅行（一）

北極旅行（二）



のみならず、また家の恥、わけては主婦の恥なればよく〳〵注意すべきなり。

はしる炭　同

炭にはいろ〳〵ありて、誠に保ちよく火の粉走るなどの憂なきもあれど、中にはつぎたすよりはやく火の粉とびて疊、着物に穴をあけ、來客などの時、とんだ誤ちを來し、甚しきは、眼などに飛びこみて、一寸またる事より不具の身ともなる事あり。これは炭の惡しきによるものなれど、智識ある主婦は走る炭を走らぬ樣にして用ふるなり。即最初暫く水に浸し置きて後、日に乾し用ふるときは、決して火の粉飛ぶことなく、又觸れても直ちに手を汚すなどの煩なく、少しの手數をかけしため火を扱ふに安心なり。

いろ〳〵の心得　同

御婦人方の秘藏道具ともいふべき、簞笥長持など虫ばみて、引出の中に粉おち、内外に小さき穴生じて、誠に心煩はしく、困る事あり。これにはパラフィン油(薬店にあり)を三四回も塗抹すれば、防ぐこと妙なり。尤も漆とかヴァニシなどの上には、ぬりの禿る恐れ

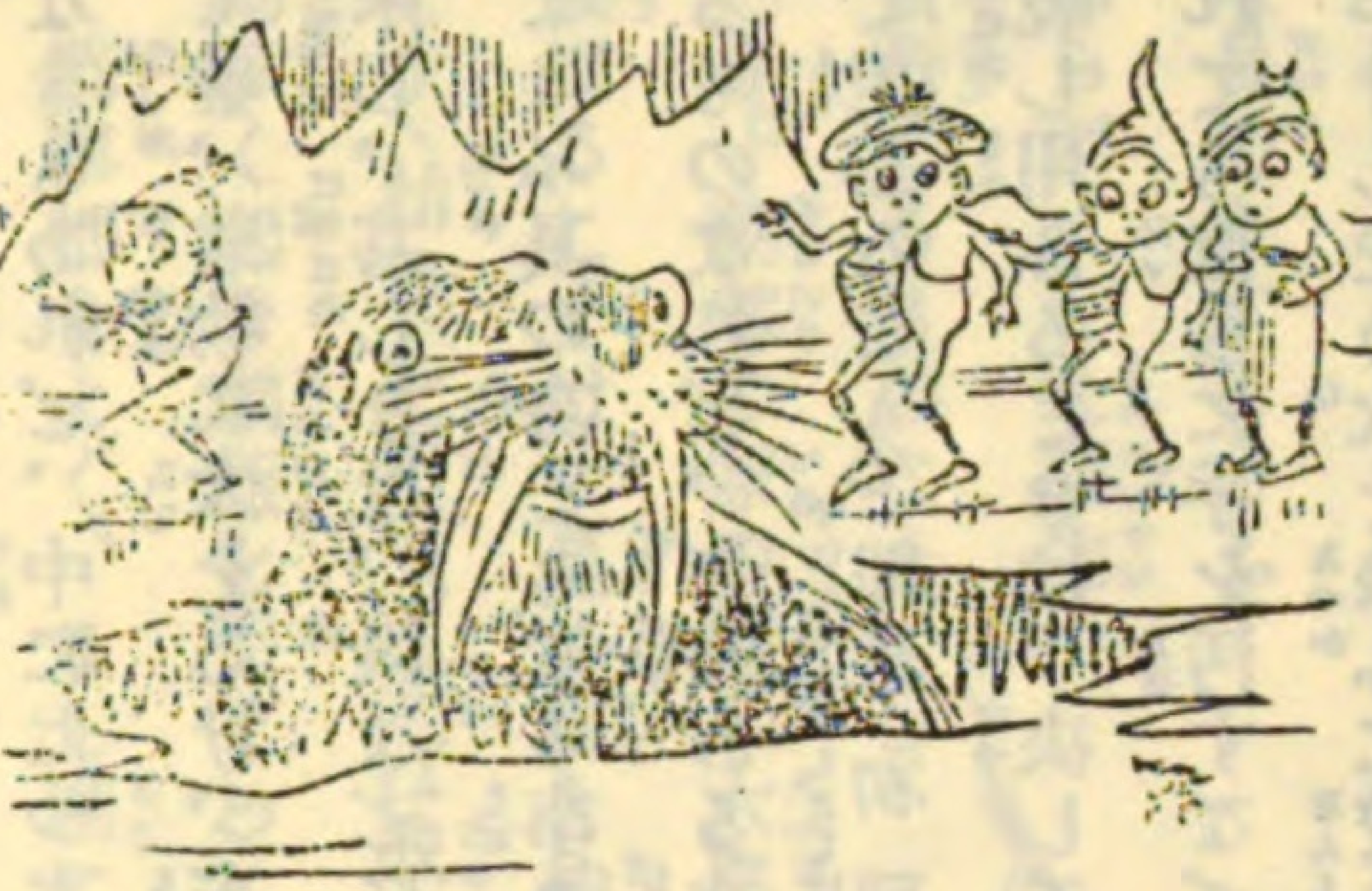
北　極　旅　行（三）



あり。

又小袖箪笥、半櫃など脂出で、入れ置きし着物を損ずることあり。これを防ぐには、初め藁を入れ置き、

北極旅行（四）



其藁に脂付きたるを取り去りて後、衣服を入るべし。檜の木にて作りたるものは、多く脂出るものなれば、兎に角右の法を施して後用ふれば、脂に汚さるゝ虞なかるべし。

お碗鍋の蓋などの漆臭きを去るには、豆腐の糟の中へ一夜埋め置くときは、臭氣全く去るものなり。

靴下などの破れを繕ふとき、編物の目に從ひ眞直に針を入るれば、多くは伸縮自由ならず、足の痛みをおぼゆ。これは右の如くせず、穴の一方の角より始めて、斜に糸をかけ始むれば、此虞なし。

何處の家を問はず、卵を用ゐざる處はなかるべし。而して其卵の殼は多く棄てゝ顧みざるものなるが、生卵の殼は割りて中を用ゐて後、直ちに半紙にうつむけに伏せ置くときは、殼の中に少しばかりの白味のこりたるが、次第にしたゝりて、半紙の上につき、度かさなりて、一枚の卵紙を得べし、もし少しばかりの切傷擦傷等を生じたるとき、其傷口に適宜の大さに切りたる卵紙を貼りおけば、容易に癒ゆべし、誠に簡便の効藥なり。

よく人の知る處なれど、猶知らぬ方の爲めに記すべし子供のシャックリを止むる眞法は、砂糖を少許甜めしむるにますことなし。

子を躾るに　　同

子供の宜しからざるところを姑く宥して、其善き所を擧げて之を奬勵すること肝要なり。子供は殊に譽めらる丶事を喜ぶものにて、一度譽められし事は、幾度も

北極旅行（五）



これをなすに至るべければ、譽るに從ひ善き所のみ長じて、惡しき所は次第に跡を絶つに至るべし。もし惡しき所をのみ折檻する如き傾きあらんが、徒にねぢけ者となすのみなり。心すべき事なり。

寒さについて　同

昔は女といへば多く家にありて、仕事をなすにも座ること多かりしが故に、從前の着物にて、別に冷へるなどの虞なかりしも、今日の如く出歩く事多くなり、特に女生徒の如きは、一日テーブルにかゝり居る故、腰より下、非常に冷へ、殆んど我足たるを覺えざるに至る事あり。これは大によろしからず、單に婦人病の元となるのみならず、數多の病根となるものなれば、母たり姉たる人は、着物の綿を厚くするのみにては充分ならず、フランネルの如き溫きものにて、股引樣のものを作り、或は綿入の裾かけを作りて、腰より下を冷さしめぬ樣に注意を與ふこそ肝要ならめ、兎角若き女生徒は此理を知りつゝも、學事の忙はしきため等にて、打捨勝になり易きものなれば、我愛女を遠方に遊學に出せる母などは別して深く注意すべき事なり。

女生徒のみならず、幼兒には男女を問はず、股引腹卷等をなさしむる事大切にて、下痢の元は多く腹を冷すによるものなり。さりとて女兒に袖長き着物を幾枚も〳〵重

北極旅行（六）



ねて着せしめ、運動の自由を妨ぐるやうの事あるはよろしからず。又付紐を着物毎につけて腹をしむるは衛生上よろしからざれば、上着のみに紐をつくる事、是又注意を要する所なり。

◉眞岡木綿の黒羽織　眞岡木綿の黒羽織一般の流行さなりぬ、三ッ紋七分五ッ紋三分、此價石持に染め抜きたる一反七八十錢、これ平民的流行

雜録

骨

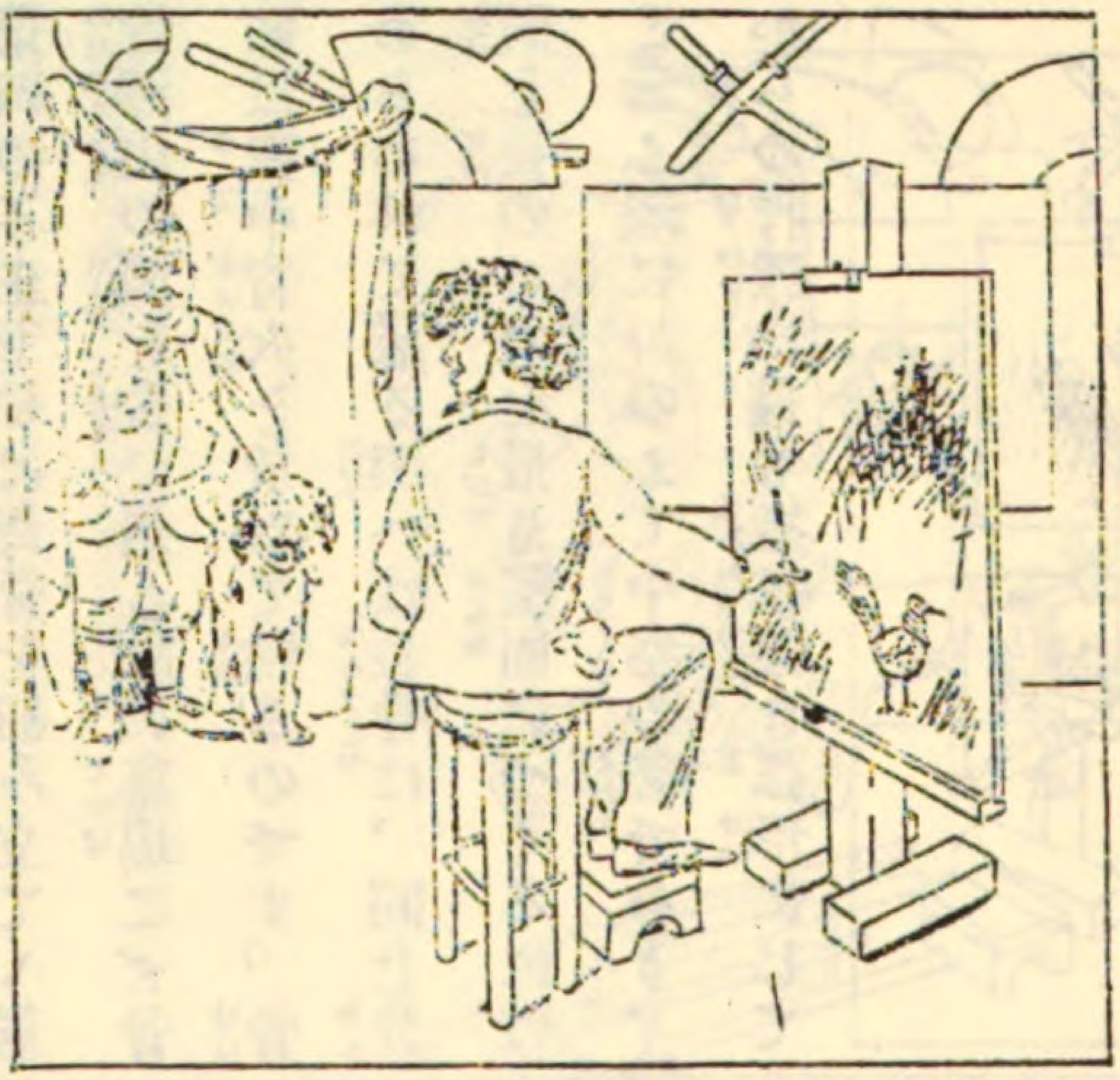
紫樓生

骨と云ふと、誠に不潔な、いやらしきものとしか思はれませんが、決して輕んずべきものではありませぬ、少しく人の躰の骨に就てゝに記しますのです。誰れでも知らるゝ如く人の躰は諸々の部分より成立ちて居り、外面は皮膚によつて蓋はれて居りましても、肉もあり、骨もある事は明かである。此の人躰は骨格と云ふものを礎として居るのであります、骨格があつてはじめて人の躰が成立ち、立派に、完全にある譯です、骨格は骨、軟骨、靱帯の三つのものが、きまりよく結び連らなつたもので、軟骨と云ふのは骨と骨との間になりあだかも人力車などのばねの如きはたらきをなし、靱帯は骨と骨とを結び合はす役をして居ります。此の骨と骨との結び合ふた

美術の勝利（一）

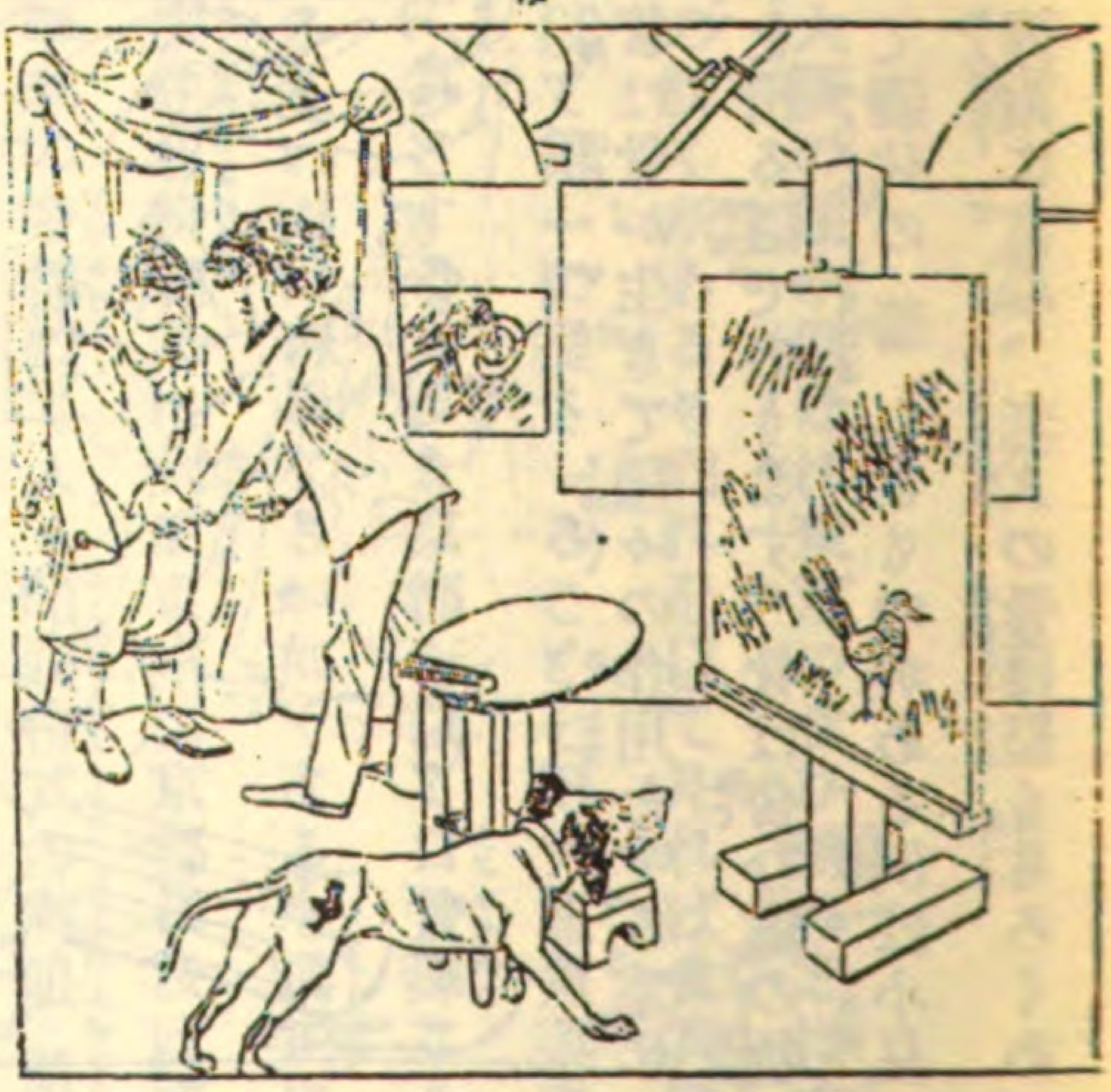


ところは、動くと、動かぬとにかゝはらず皆關節と名けます。此關節の動かぬもの丶内で、頭骨の關節は、甚だ複雑にして鋸の齒の如き線をなせる組み合せをなして居りますが、これには特別に名を縫合とつけて又其縫合に六つの名があります、其名は擧げません。動く關節には僅かに動くと、自由自在に動くとの二つがあり、例は背中の關節は僅かに動く方で、手足の關節は自由自在の方である而して此自由自在に動く分だけを又四種類に別けられます。



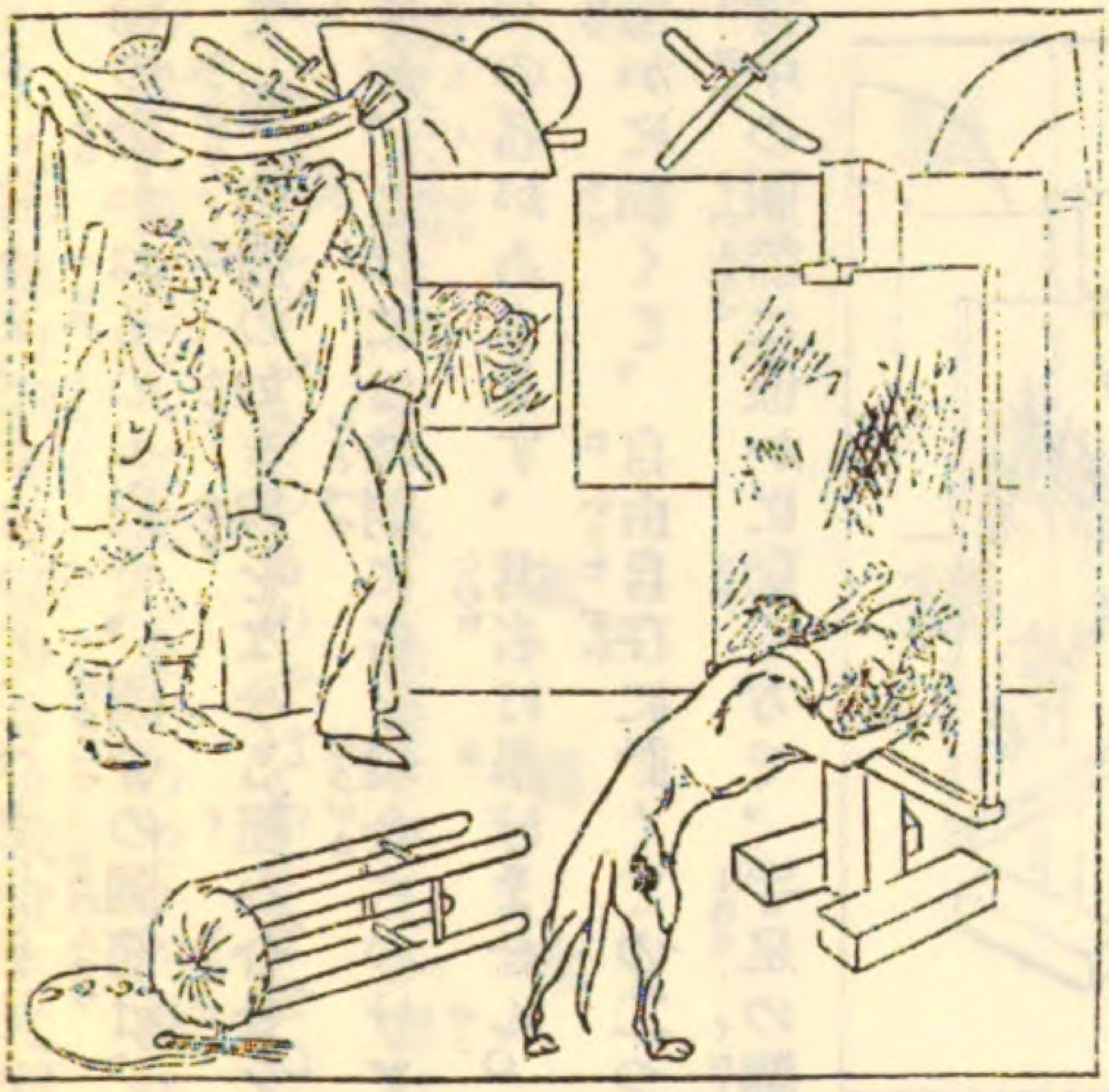
美術の勝利（二）

人の躰の骨格を木にたとふるならば、頭より腰までは幹で手と足とは枝でありましよう、人の骨格を組み立つる骨の數は大小すべて貳百以上あり、形も様々でありますが、これを長骨、短骨、扁骨、不正形骨の四種に大別が出來るそして又其役目も各々異なつて、第一長骨は手や足に於て槓杆の作用をなして人に運動をさせ、第二の短骨は長骨と長骨の間にあつて手首などの如き節をかたちづくり、第三の扁骨は腦、肺、心臓等の大切の機關を保護する



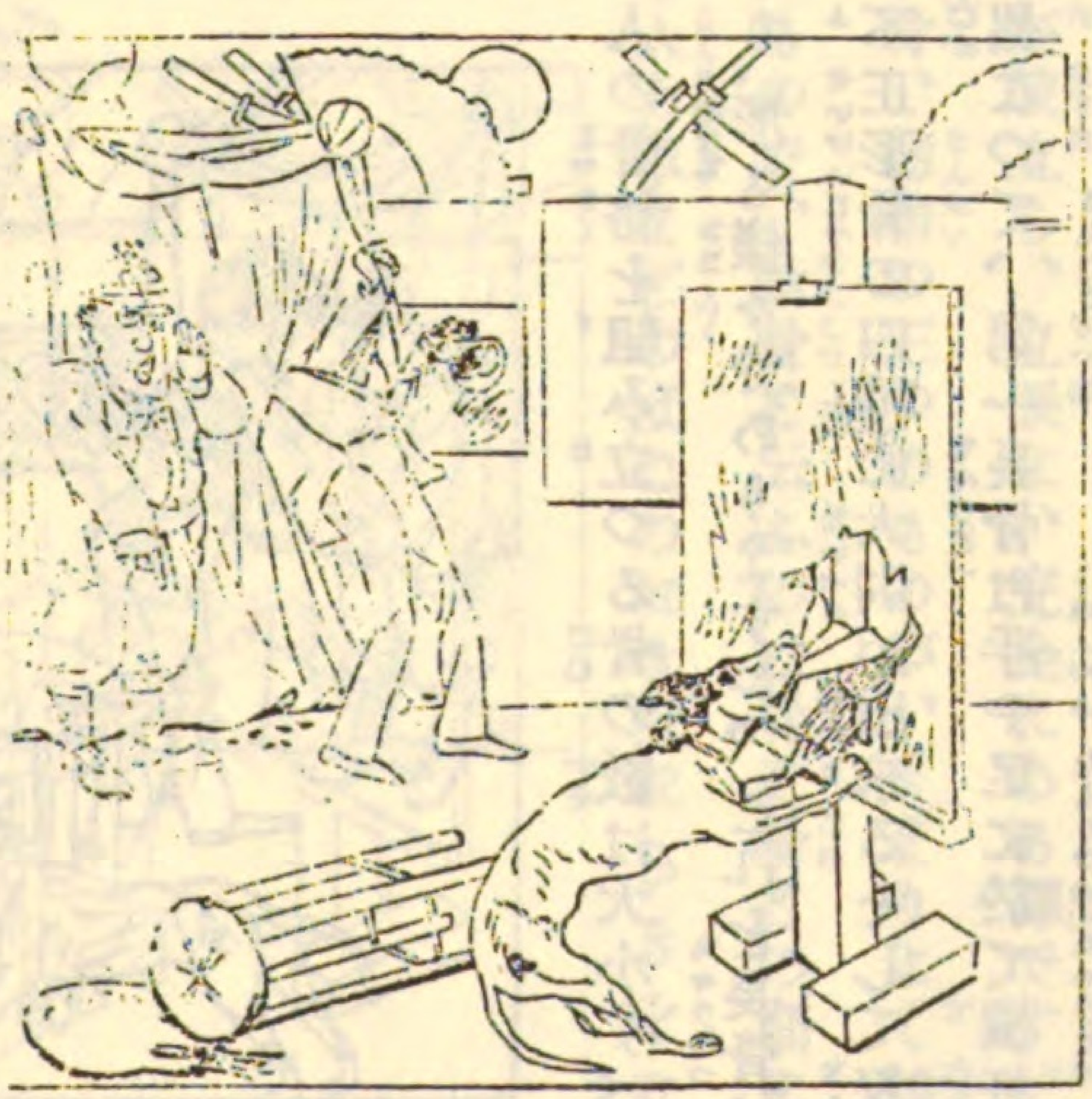
美術の勝利（三）

城の壁を築き、第四の不正形骨は背骨を組み立てゝ居る。此等の骨は皆澤山の燐を含で居る故に墓場など骨の捨てゝある處には夜中青火を放ちて燃るのです。骨は自然に意匠があらわれて居る例へば長骨は、同じ分量の物質を以て同じ長のものを最も堅固につくるには管につくるべしと云ふ理にかのぶて中空の管であり、又頭の骨は外部からの打撃に最も抵抗強き弧形にしてあり其他躰中の骨が驚くべき意匠を表はして居ります。



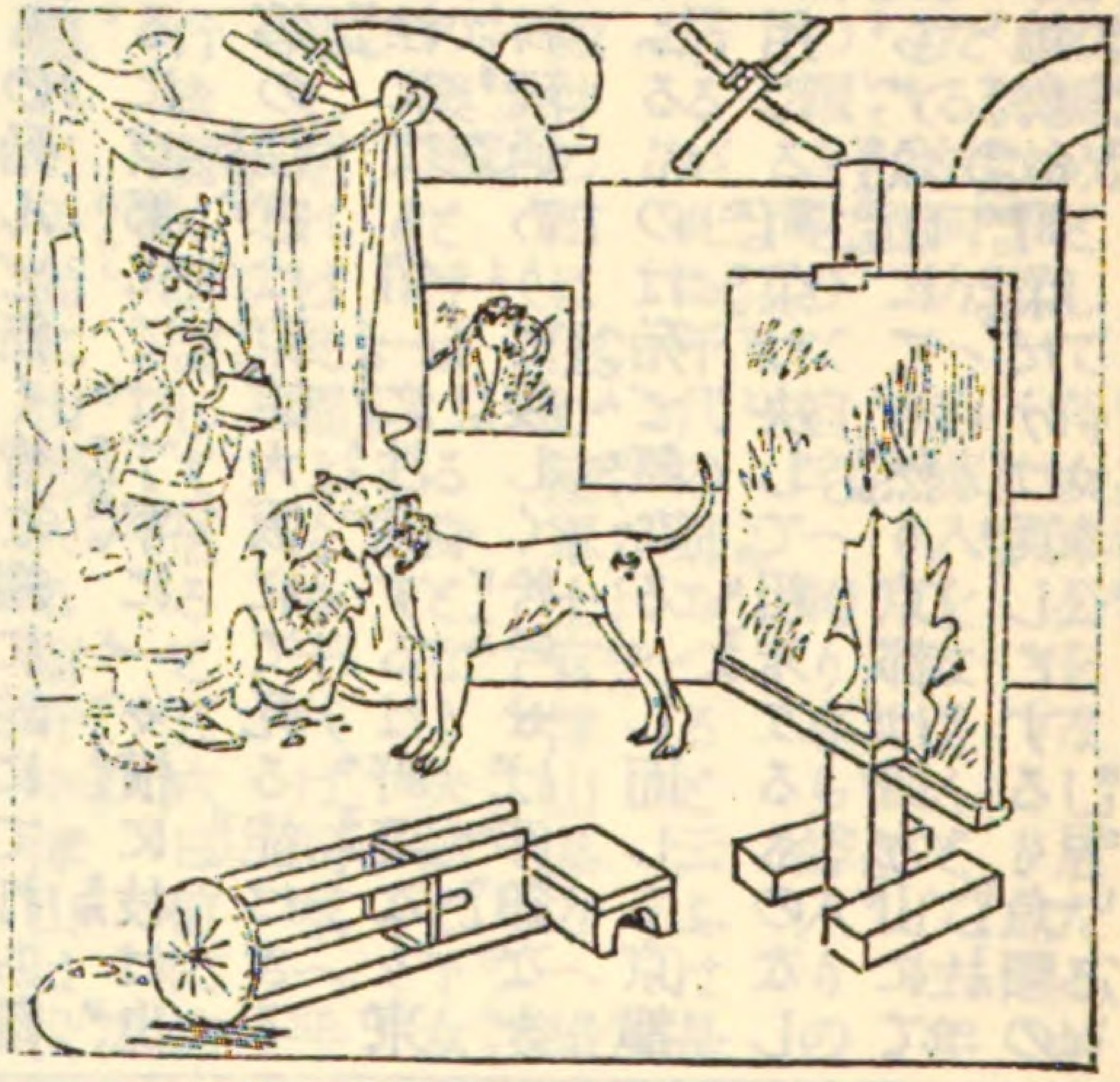
美術の勝利（四）

骨の一片を取て顯微鏡の下に見るときは、第一に骨質に多くの孔があり其孔の周回は恰もらつきようを横切にした様に幾重も環が廻つて居つて其環と環との間には澤山の小孔がある、そして又其中心の孔より環を貫きて四方八方に發射して居る細き管があります。此等の孔や管は骨が生きて種々の作用をする爲に營養分即ち食物を得る道であります。骨は含む處の物質の增減に從つて變化の著しきものがある例ば小兒の骨は軟かく、彈力に富み、老人の骨は堅くもろくあ



美術の勝利（五）

って一寸した事より折り損じする事があります、能く小供や老人を扱ふに心得て置くべきです。以上に記しました處より取つまんで申すなら骨は人の躰の礎で躰の重を支へ、筋肉の附着する處にして種々の作用により運動を與へ、極めて大切なる腦等の内臓を保護するものとすることが出來ます。



美術の勝利（六）

三都の衣食住

京の着倒ほれ大阪の住み倒ほれ東京の食ひ倒れとは古來一般に世人の説く所あるも我れを以て見れば食衣住ともに京都を以て第一に推さゞることを得ず鹿角菜に油揚のみを常食とする人多き京都を以て口贅澤なる東京より勝さるといふは奇異なるが如くなるも眞正に注意したる衣服住居料理には到底東京は京都に及ばず實に京都は千年來の帝都にて人々門閥格式の制限嚴なりし爲に表面に見ゆる華奢を避けたる代りには裏面に人目を曳かざる部分は頗る贅澤の意匠を凝らしたる所多し衣服の高尚にして織方染方の全國中に最も發達し居ることは言ふを俟たず庭花の構造器物の古雅なるが如きは又必ずしも言はず其座敷の建築に少しく注意したる柱には出節なるものなく大抵は入節のみなり東京の座敷の柱に節の出入を注意するが如きは甚だ少な

し是れ入り節は衣服の觸れても損ずること無ければとも出節なれば數しば觸れて損傷し易きにより之を避くるなり又東京にて竹を買はんとするに其の枝を鋸にて引き落としたるもの殆んど無く皆な縱に鉈にて打ち落としたるのみ然るに京都にては丁寧に一々横に枝は曳き落とすなり此等の注意は東京大阪にて見る能はざる所とす次に料理法にても第一に注意するは野菜なり東京の料理は若し料理通ありて委しく吟味せば非難なき滿足の野菜を用ふるものは殆ど無なるべし而して京都にて儀式の席に用ふる野菜は決して粗末なるものなし特り野菜のみならず魚類にても然り京都は四方山にて圍む擂盆の如き地勢故野菜だけは良しとするも魚類の新鮮なるものは豈海畔の東京に及ばんやと西河岸邊の勇み肌連は言ふなるべきも料理屋にて其の魚類の撰擇杜撰なる故正しき料理は調ひがたし方今東京にて眞正に缺點なき魚類を使ふものは八百膳のみ余は嘗て八百膳に赴き午餐を喫せんとて鯛の刺味を注文したるに今日はお生憎サマとて主人は深く謝したり其の日の夕刻に八百松に至れば大なる鯛を澤山料理に使用せり是れ八百松に使用する鯛は澤山あるも八百膳に使用すべき鯛はなきなり正式の料理法は第一に魚鳥野菜の良否を鑑別するを以て秘訣とす余は嘗て八百膳に至り井戸端に起て其の使用する魚類を一見せしことあり成程魚類は吟味して一尾も怪しき物を置かさりき余は主人を呼びて之を賞したるに主人は長大息して近時此道も大に衰へ人の眞正に料理の良否を鑑別するものなきを嘆じたり其れも其筈なり東京の貴客は書生上りの大臣ならざれば一代富限の紳商多し高尚なる料理は其口に適せざる故勢ひ格式外れのお手輕料理を助長するものなり去れば此の點に於て京都の料理が東京に勝るや遠しと

（石黒總監のはなし）

料理の失策

麹町區三番町に住む宮内省官吏今井某の令嬢此歳十九になるお千代と云ふは先頃まで或るやんごとなき方のお邸へ行儀見習の爲めとして侍女奉公をなし居たるが最早年頃に及びたる故何方へか嫁入をなさんとて去年の冬よりはお邸の暇を乞ひて自宅へ歸り專ら嫁入りの支度に取懸つて居るが此お千代の姉おつると云ふは是より以前既に赤坂仲の町に住む陸軍士官津山某方へ縁付きて今は津山の奥樣と呼ばはる身となり夫婦と下女一人にて安樂に暮し居れば此程よりお千代は同家へ手傳ひ旁々遊びに行き暫く逗留して居ると五六日前に姉のお鶴は下女を連れて年始に出懸たる留守中津山は役所より立歸りて寒中の鰌は藥になる故今日は鰌汁が喰ひたいと云ふのでお千代は委細心得て下女の代理を勤め早速出入の八百屋に注文して鰌五合を買求めたれど鰌汁と云ふものは如何して拵へる事やら更に知らねば色々と考へたる末先づ味噌汁を鍋に煮て充分沸騰たる中へ五合の鰌を打ちまけたる故鰌は驚いて刎廻り味噌汁の中にて脆くも死を遂げしものは世話がなくて結搆なれど鍋の外へ飛び出したるものは板の間の上を刎廻つて鍋のあたりは水と味噌汁と鰌とで亂暴狼藉の有樣となつたので之れは大變とお千代は必死の骨折にて刎廻る鰌を一疋づゝ掴まへては鍋の中へ投込み漸との事で皆煮殺して仕舞たので先々是れで鰌汁も出來上りと軈て此鰌汁を津山に薦めたるに津山は一口吸ふて舌打鳴らし此汁は大層甘いが鰌の骨は滅法界に堅くて何時もの鰌とは違ふ樣だと云ひしにぞお千代はハッと思ひて答へも出ず其の夜は早速三番町の自宅へ歸つて何やら心配の躰で鬱いで居るので母親の某が何事なるかと尋ねて見ると右の鰌汁の一件なれば母は笑ひながら鰌汁の拵へ方を敎へ鰌を先づ酒にて殺したる上牛房をそ

いで其中に入る段取まで細々と説聞かせたるにお千代は成程と發明し翌日又津山方へ赴むきて姉に前日の失策話しをなし今日は本式に鰌汁を拵へて昨日の埋合せなさんとて下女のおまんに吩咐けて鰌と牛房とを買求めさせ母に敎へられし通りに先づ鰌を酒にて殺し置き軈て味噌汁の中に入れて津山に薦めたるに津山は又一口吸ふて顔をしかめ是れは非常に酒臭いとて性來酒嫌ひなれば大いに閉口し如何した譯かと細君にも話し細君のお鶴よりお千代に其拵へ方を尋ねると母に敎へられし通りに鰌を酒にて殺したのは宜いが鰌を殺す爲めに使つた三合ばかりの酒を鰌と共に味噌汁の中へ入れた事と分りお千代は二度の失策に顔を赤め其儘自宅へ逃歸りたるが又候心配氣の顔付に母親は不審に思ひ其仔細を聞いて見ると又もや鰌汁の失策と分り果ては今井と津山との兩家にて大笑ひの種

歌苑

新年鶴二首　（宇都宮　後凋女史）

あら玉のとしたちけりと久方の雲井はるかに田鶴もなくらん

千代うたふたつの聲にもすめらきのめてたきみよをいはふなるけき　（同　人）

新年朝

朝ほらけ二荒の山にのほりきてまつこそ仰け御代の光を　（同　人）

廿九年を迎へて二首

明けき大み光はさつくにのはてまてとらす御代のはつさし　（同　人）

もろこしのさらふす野邊の民草もおなしめくみになひくけふかな　（東京　村瀨のぶ子）

松と雪

今朝みれは松の葉白しよいの間のみぞれやいつか雪になりけん　（同　人）

池水

吹きおろす向ひか岡の風さへてこほりさちたる不忍の池　（同　人）

雪中梅

さへかへりまた消やらぬ雪の中に獨り春知る庭の梅か香　（同　人）

名取山

いつの世に如何なる人に契りおきて待兼山と名にはおひけん　（同　人）

貝

年波のより來る磯のすたれ貝ひろふ人さへなきそかなしき　（群馬　かすみ）

雪

よもすから赤城おろしのふきまきてあくればつもるけさの白雪　（同　人）

正成公

湊川流るゝ水はかれぬとも君がいさをは久しかりけり　（同　人）

正行公

あづさ弓引てかへらぬまごゝろを千代までのこす如意輪の堂　（京都　澤田濤松）

君

九重の千代田の宮を仰き見て祈る心はたゞ君のため　（同　人）

親

父母のみさしおそはは年月のあたにすき行くこそかなしき　（同　人）

闇夜尋梅

たつれ見む月はあられさ闇部山くらさ道にもしるき梅か香　（松本　下條さだ子）

寄海祝

立ちさわく浪の浮雲すへはれて沺安らけき御代そたのしき　（同　人）

家庭雜誌の歌苑を喜て

かきりなく榮にゆかなん千萬の花さく庭の文の林は　（同　人）

夜春雨

よもすからふるさともみへぬ春雨はのきの玉のふの聲にそしる　（同　人）

朝春雨

春雨のふるすた出つる鶯のこへも玉めれるあさはらけかな　（同　人）

閑居の月　（娶太　大住貞懿）

こゝはいづこか白浪の、よせては返すありそ海、
岸に生ひ立つ老松の、梢にすさぶ汐風も、
いさゝあはれに聞ゆなり。
山里遠くへだつれば、秋きにけりさかりかれの、
告げ志らされど溢荻の、音のさわぎは中々に、
悲しかりけり秋の夜半。
つま戸をたゝく汐風に、雲のかよひ路ふき止めて、
高くさえたる秋の夜の、つゆのくまなき月かげそ、

いさゞ清らにすみわたる。
あはれうらめし我庵を、おさなふ友のありもせば、
かたらふ人のありもせば、うれしからまし今宵の月、
たのしからまし今宵の月。
なりしもかゝるむら雲に、あきらけかりし月影は、
つれなく見ねすなりにけり、遠にうたふ舟こらの、
聲のみあはれに聞ねつゝ。　（東京　水田みづほ）

落花流水

峰のかすみにつゝまれて
にほひし花もはかなしや
ちれば一夜のあらしにて
谷の小川ははなびらを
時のながれさもろさもに
青葉のかげにはこぶなり　（群馬縣　藤生友光）

鏡

人の心もうつるぞさ　思へはゆかし友鏡
互にてらせくもりなく　淸き光をそへつゝも　（同　人）

學べよ小供

學べよ小供たゆまなく　水の流はたゆまなし
學へよ小供やすみなく　時計の針は休みなし　（横濱　松　筠　生）

初春

いつのまに春來にけらし朝日さす軒端の梅も匂ひゆかしく　（同　人）

海上霞

わだの原浪路はるかにこぎ出てゝ霞に消ゆるあまの釣舟　（同　人）

梅間鶯

鶯の聲もかほりて聞ゆなり梅のさかりの小向井の里　（同　人）

曉鶯

鶯の曉つぐるうれしさに今日は早くもおきにけるかな　（群馬縣　藤生友光）

廣丙號

其一

あないたゞしや／＼　名殘の旗も取すてん
雨や霰と亂れ飛ぶ　彈丸の中にて戰ひし
猛き心もきほうせて　今は昔となりにけり
天津御空に輝きし　旗かゞげ尋ねん跡もなく

其二

あないたましや／＼　浪間の稻妻音凄し
水くふ屍と大夫が　勇み勇みつ戰ひつ
血汐に染し甲板は　今は破れてかたもなし
天津御空に閃きし　日の御旗見んよしなし

其三

あないさをやし／＼　此世の名殘いざつげん
功勳も鎧も諸共に　暴風の神の犧牲として
千尋の海の奥都城の　永き眠に沈みなん
天津御空に轟きし　功勳も名譽も影さめじ

春霞　(同　人)

朝夕に馴ゐ外山の見えぬまで霞むや春のしるしならん

若菜　(同　人)

ほの／＼と霞める野べに打出てゞわか菜つまなん袖のかたみに

春風　(同　人)

なつかしないつこの枝にふれつらん梅が香送る軒の朝風

鶯　(信濃　白虎生)

あさまたき鳴く鶯の聲きけはひと日心も樂しかりけり

花下契多春　(同　人)

幾春をへても變らぬ花蔭に神酒くみあひて千代を契らん

網代　(同　人)

瀨をはやみあじろにかゝる水音の枕にひゞく夜半の淋しさ

◎正誤　前號第六十九號新年大附錄德富蘇峰の『下村房子』中蘇峯生とありしは蘇峰生の誤。又金子春夢の『糸のもつれ』に往々祖母を伯母と誤りたる處尠からず茲に校正の粗漏を謝す。又本號佐々木信綱氏の『島田愛子』中心臟の呼吸とあるは鼓動の誤。又肝油の注射とあるは「カンプル」の注射の誤。

社告

歌苑

毎號『歌苑』の一欄を設け三十一文字及新躰歌(最も短篇を可とす)を汎く江湖に募る

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍印行